

長崎県文化財調査報告書 第165集

**県内主要遺跡内容確認調査報告書V**

2002

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第165集

## 県内主要遺跡内容確認調査報告書V

- 長崎鼻遺跡（宇久町）
- 磯石原遺跡（島原市）

2002

長崎県教育委員会

# 発刊にあたって

長崎県内には約3,800カ所の遺跡があることが確認されています。県ではこのうち155カ所の主要遺跡について長崎県の歴史の解明と、文化財保護の基礎資料とするために、平成8年度より遺跡の内容確認調査を実施しております。

本書は、平成12年度に実施した島原市に所在する礫石原遺跡と宇久町に所在する長崎鼻遺跡の調査報告書です。

礫石原遺跡は縄文時代晩期の遺跡として全国に知られていましたが、その内容や範囲については一部しか知られていませんでした。また、長崎鼻遺跡も旧石器時代から古墳時代の遺物が採集されていましたが、確実な内容については礫石原遺跡と同様の状況でした。

今回の調査では、その範囲や内容について多くの成果を挙げることができました。

この成果が、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整のための基礎資料として活用され、県民の皆様の文化財に対する理解と愛護精神に繋がれば幸いです。

今後とも、文化財への御理解を賜りますようお願いし、発刊の言葉とさせて頂きます。

平成14年3月30日  
長崎県教育委員会教育長  
木村道夫

## 例　　言

1. 本書は長崎県教育委員会が平成8年度から実施している県内主要遺跡内容確認調査の結果報告である。
2. 本書には、平成12年度に調査をおこなった長崎鼻遺跡（北松浦郡宇久町）、礫石原遺跡（島原市）の結果報告を収録した。
3. 本書では各遺跡について分担執筆をした。それぞれの遺跡についての執筆者は以下のとおりである。

長崎鼻遺跡 福田 一志  
礫石原遺跡 古門 雅高

4. 詳細は各項の例言を参照されたい。
5. 本書の総括編集は福田がおこなった。

# 総　　目　　次

## 第Ⅰ部 長崎鼻遺跡

### 北松浦郡宇久町所在

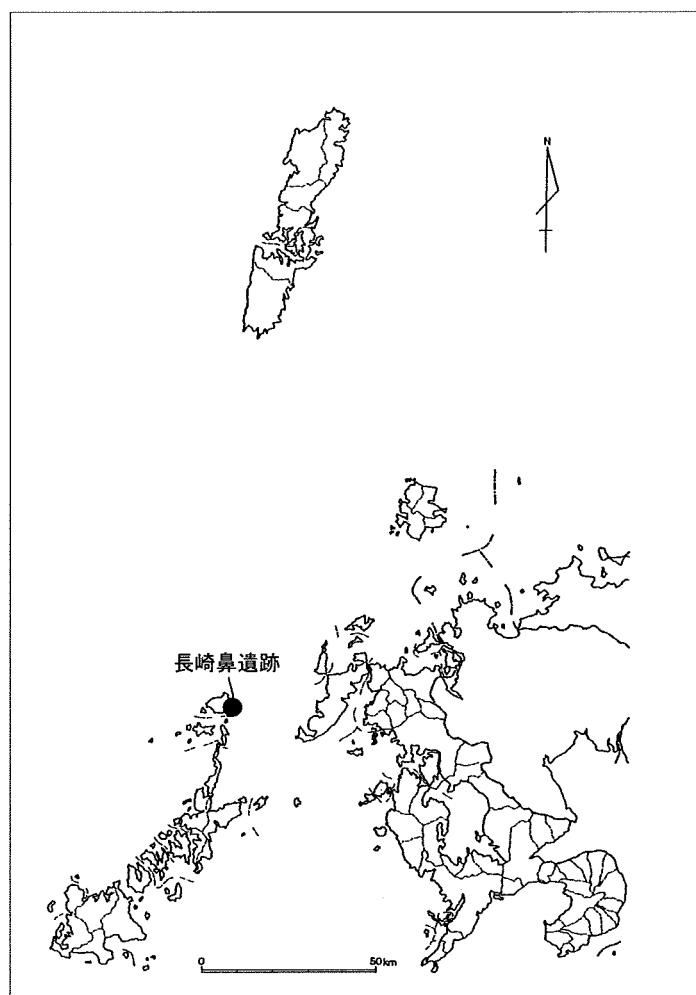
第Ⅰ章 地理的歴史的環境 .....	5
第Ⅱ章 調　　査 .....	9
第Ⅲ章 遺　　物 .....	12
第Ⅳ章 ま　と　め .....	15

## 第Ⅱ部 磯石原遺跡

### 島原市所在

第Ⅰ章 地理的歴史的環境 .....	32
第Ⅱ章 磯石原遺跡の調査履歴 .....	33
第Ⅲ章 調査の概要 .....	36
第Ⅳ章 遺　　物 .....	42
第Ⅴ章 ま　と　め .....	46

## 第 I 部 長崎鼻遺跡



## 例　　言

1. 本書は北松浦郡宇久町字長崎鼻に所在する長崎鼻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり、宇久町教育委員会の協力を得て、平成12年7月24日から同年8月9日にかけて実施した。
3. 調査関係者は次のとおりである。

調査担当 長崎県教育庁文化課 文化財保護主事 福田 一志  
文化財調査員 高原 愛

調査協力 宇久町教育委員会

4. 遺構の実測は調査担当者がおこなった。
5. 遺物の実測は福田がおこない、一部について佐藤いづみの協力を得た。トレースは渡辺洋子の協力を得た。
6. 本書における遺物・写真・図面については長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。
7. 本書の執筆・編集は福田がおこなった。

## 本　文　目　次

第Ⅰ章 地理的歴史的環境 .....	5
1 地理的環境 .....	5
2 歴史的環境 .....	6
第Ⅱ章 調　査 .....	9
1 調査概要 .....	9
2 層位 .....	10
3 遺構 .....	10
第Ⅲ章 遺　物 .....	12
1 土器 .....	12
2 石器 .....	13
第Ⅳ章 まとめ .....	15

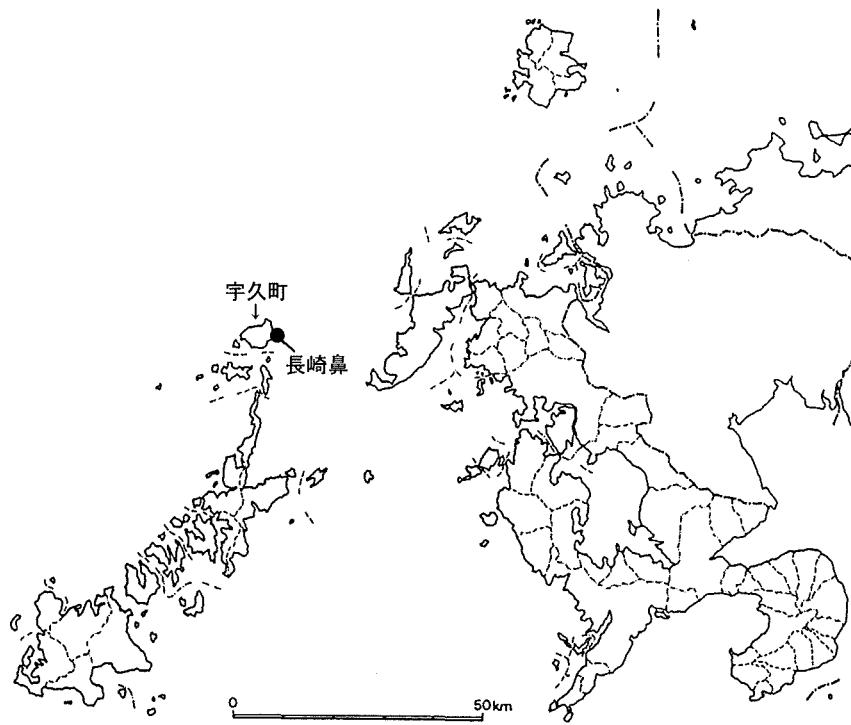
## 挿 図 目 次

### 遺跡位置図

第1図 宇久町位置図 .....	5
第2図 長崎鼻位置図 (S = 1 / 25,000) .....	5
第3図 宇久町の遺跡分布図 .....	6
第4図 周辺の遺跡からの表採遺物、出土遺物 .....	7
第5図 長崎鼻遺跡群と調査地点 .....	8
第6図 土層図 (S = 1 / 40) .....	11
第7図 集石遺構 (S = 1 / 160) .....	12
第8図 土器 (S = 1 / 3) .....	13
第9図 石器 (S = 2 / 3) .....	13
第10図 石器 (S = 2 / 3) .....	14
第11図 石器 (S = 2 / 3) .....	15
第12図 石器 (S = 1 / 2) .....	17

## 図 版 目 次

図版1 遺跡遠景・近景 .....	21
図版2 土層の状況 .....	22
図版3 土層の状況及び積石塚A .....	23
図版4 集石遺構 .....	24
図版5 遺物出土状況 .....	25
図版6 遺物 .....	26
図版7 遺物 .....	27



第1図 宇久町位置図



第2図 長崎鼻位置図 ( $S = 1/25,000$ )

## 第Ⅰ章 地理的歴史的環境

### 1 地理的環境

宇久町は行政区上、北松浦郡に属し五島列島の最北端に位置する。五島列島中、北松浦郡に属するのは宇久町と、宇久の南西側に位置する小值賀町のみである。この2島は、昭和34年の総理府告示によれば平戸諸島として位置づけられており、五島列島とは切り離されて考えられている。古代律令制下においても五島と切り離されており、五島とこの2島が古代以来、行政区画上相違していたことがどこに起因するのかは大きな問題であろう。

そもそも、五島の人々の相互の交流は現在に

おいても少ない。中通り島と福江島では、生涯一度も行ったことがないと言う人も少なくない。また中通り島と小値賀・宇久島の人でも同様である。現在、福江島は長崎、中通り島・小値賀・宇久は佐世保に定期便が就航しており、大きくは佐世保交流圏と長崎交流圏に2分されている感がある。一口に五島といっても地理的には変化に富んでいる。宇久・小値賀島はやや耕作地に恵まれるとともに、

海岸線は複雑ではあるが、ウニをはじめ、海の幸に恵まれている。これに対し、中通り島は一見対馬島に似ており、峻険な山々が連なりそのまま海へと没する。従って平地に乏しく、耕作地に恵まれていない。五島列島の中でも断続的に遺跡が存在する宇久・小値賀町島の歴史を育んだものがこの環境にあると言っても過言ではなかろう。また、五島列島の最北端、つまりは九州の最西端という地理的位置が、多くの文化を集中させ、次へ伝播するには格好の場所であったと言える。宇久島は日本の北西隅にあたり、文化交流の集積地と言うことも出来よう。

## 2 歴史的環境

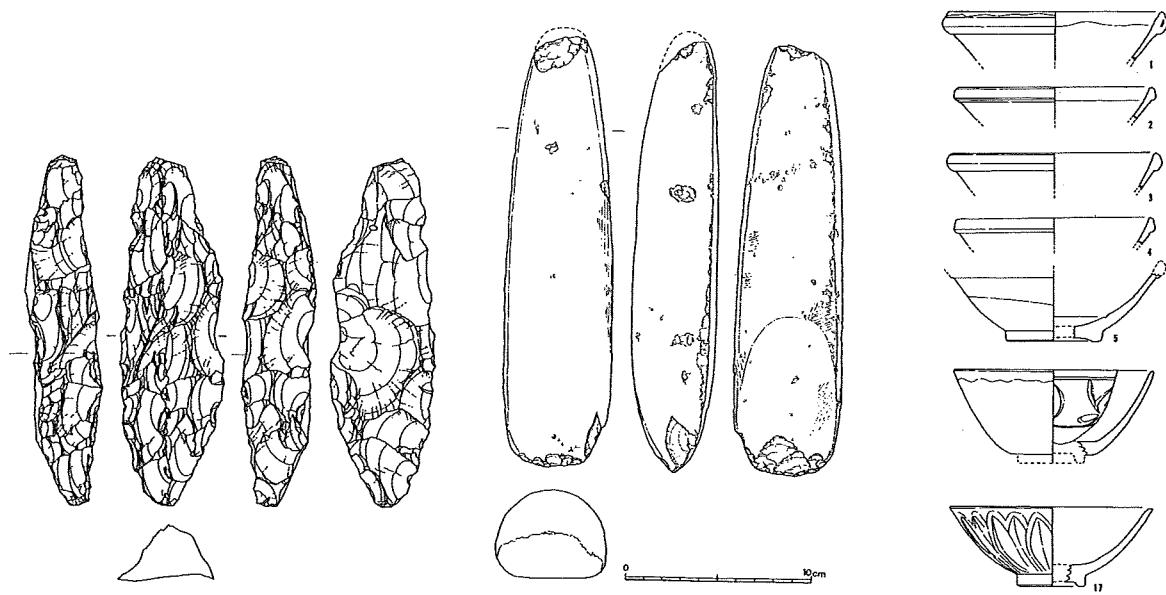
宇久島の遺跡数は現在52箇所を数え、時代的にも旧石器時代から近世に至るまで連綿と続いている。先に述べたように、平坦な地と峻険な山との割合がバランス良く立地することが多くの遺跡を残すことになったものと思われる。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は幾つかの調査事例によってその内容が知られるが、表面採集でも良好な遺物が採集されており、これらの中には旧石器時代や縄文時代を考える上で重要な資料も含まれている。調査された遺跡については報告書等に詳しいが、ここでは今回表採した遺物や主な遺跡について紹介する。

調査終了時に周辺の遺跡を踏査した際に、城ヶ岳周辺で大形の三稜尖頭器を採集した。場所は城ヶ



第3図 宇久町の遺跡分布図

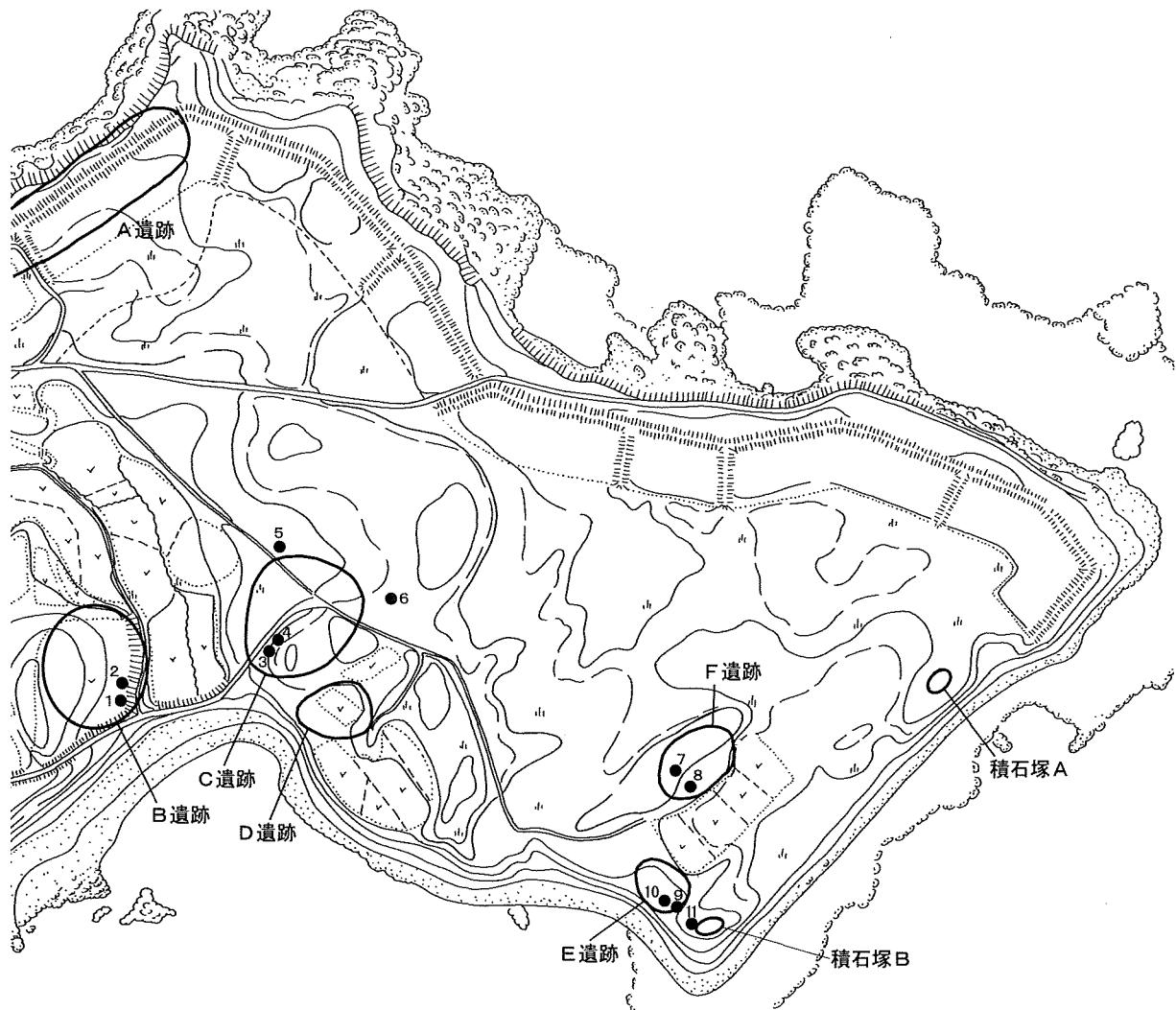


第4図 周辺の遺跡からの表採遺物、出土遺物

岳登山道入り口付近の道路の切り通しで、大鉢遺跡として周知されている場所である。この切り通しには赤褐色のローム層中に大形の玄武岩の原石の露頭が見られ、表土下20cmほどのところで遺物を発見した。最大長18.5cm、最大幅5.5cm、最大厚3.9cmを測る大形の三稜尖頭器である。加工の工程としてd面の先端部に主要剥離面の痕跡を残しており、この面からc面の右側から剥離をおこない最終的にb面の左右からの調整を基本としている。d面中央の剥離は、c面の剥離面を打面としてかなり大きな剥離痕を残し d面の基部側の剥離も最終調整痕である。両端に自然面を残すことから、加工途中に廃棄された可能性が高い。したがって、最終的には幾分小さめになるものであろう。このような大形の三稜尖頭器は、県内では見られず佐賀の多久三年山遺跡での大量出土が知られるくらいである。

丸ノミ型石斧は、地元の郷土史家、瀬尾泰平氏が採集したもので、この資料については川道によつて報告されている。丸ノミ型石斧は南九州地方の縄文草創期にまで遡る石器として知られており、黒潮文化圏の派生を考える上で重要な遺物として評価される。

城ヶ岳平子遺跡が昭和57年に調査され、いわゆる宇久島型の細石核として著名である。宇久島型の細石核は、小型の黒曜石の原石を半割し、打面を作り出して小口に作業面を形成するもので、ひじょうに小形の細石刃を剥離することで知られている。時期的には、縄文時代の草創期に属する物と考えられる。弥生時代の遺跡は砂丘上に形成された宇久松原遺跡が著名である。特に埋葬形態として多くの支石墓が確認されたことは、朝鮮半島の墓制が宇久島にまで影響を与えたことや、他への伝播経路を考えるうえで重要である。古墳から古代については宮ノ首遺跡の調査がある。遺跡から出土した大量的アワビから、水産加工をした施設の存在の可能性が指摘されており、古代の生産遺跡として位置付けられている。また、馬の臼歯出土から牧の存在をも想定している。



第5図 長崎鼻遺跡群と調査地点（1～11はTP番号）

宇久の中世については平家盛伝説があり、山本館を根拠としたとされている。山本遺跡については平成7年度の調査によってピット群や、船載陶磁器が出土しているが、平家盛が下向したとされる12世紀後半の時期以前の遺物もあるなど興味深い資料がある。いずれにしても中世において、五島列島の中世をリードしてきた宇久氏の居住地であったことには相違なく、今後の調査によっては中世の良好な遺構・遺物が出土することが期待される。

## 第Ⅱ章 調査

### 1 調査概要

長崎鼻周辺は、長崎鼻A遺跡～F遺跡と長崎鼻積石塚A・Bの8カ所が知られている。この8遺跡の概要と今回の調査地点について説明する。

長崎鼻A地点は、従来長崎鼻入口遺跡として報告されていたもので、縄文土器などが採集されていた。今回、調査区を設定することが出来なかつたが、道路の際に旧石器時代のものと思われる剥片等を採集することができた。包含層が残存している可能性が高い。包含層と思われる層位の上には砂が2m以上の堆積が見られる。

長崎鼻B遺跡は、小貝塚が以前調査されている。貝塚は中世のものとされているが、周辺からの表採遺物として並木式土器の他石器類が多量に採集されている。長崎鼻C遺跡は鞍部を呈しており、縄文後期を主体にA～F地点の中でも遺物が多く採集されている地点である。現在は中央に道路が縦断しており、その壁面に遺物が散見される。長崎鼻D地点は須恵器が採集される地点で海岸部に近く、現在は牛舎が建ち並んでいることから調査区の設定は出来なかつた。長崎鼻E地点も須恵器を主体とするもので、隣接する積石塚Bとの関連が指摘されていた。長崎鼻F地点は並木式土器や石鋸などが採集されている。また、炉址状遺構が2基、現地表面に露出していることが知られている。積石塚A・Bは20～30cm大の玄武岩の円礫を積み上げた、径7～8mに及ぶ塚である。径については崩落して広がりを見せているものと思われ、厳密な径は定かでない。調査がおこなわれたため、その内容は確認されていない。土地の人によれば疱瘡墓とか漂着人の墓などの言い伝えもある。近くに須恵器などが表採される長崎鼻E遺跡があり、その関連も考えられる。高塚墳は五島列島の中でも現在小値賀島に2基知られるのみで、他には存在しない。この積石塚の内容確認の必要性を感じる。

今回の調査は長崎鼻B遺跡・C遺跡・E遺跡・F遺跡の4地点と長崎鼻積石塚Bの周囲に調査区を設定した。B遺跡の小貝塚はすでに消滅しているもようで、貝塚の断片が残存している可能性と生活址を求めて、丘陵上に2箇所のグリッドを設定した。遺物は小片ながら幾つか確認されたことから、近くに集中区がある可能性がある。この地域は範囲が広く畑を広げる際に幾分削平したとされるが、1m50cmほど下に包含層が確認された。C遺跡は調査区を設定する以前に道路の切通しから遺物がのぞいていたため、包含層が期待された。調査区は1m×5mを2箇所設定し、TP3・4(2×5m)とした。TP3・4ともに遺物が出土したが、特にTP3からは炉址状の遺構を確認し、その周辺から大量の石核・剥片が出土し、剥片剥離作業をおこなつた場として捉えるに至つた。同じく放牧場内にTP5・6を設定したが遺物の出土はなく、土層もTP3・4とは大きく相違していた。E遺跡には1m×4mと1m×5mのトレンチを設定したが、表土下10cmで岩盤に到達し、遺物等の出土はなかつた。畑の拡張によって包含層が切られたものと判断した。F遺跡にはTP7・8(2×5m)2箇所を設定した。TP7は炉址状遺構にほぼ垂直に設定したが、遺物の出土は見られなかつた。TP8では敲石状のものが1点出土したものに遺物はなく、炉址状遺構が露出しているように包

含層も消滅したものと判断した。ただし、東側の微高地には包含層が残存する可能性がある。この他積石塚Bのそばに2×2mのグリッドTPを設定したが、遺物等は検出できなかった。

以上のことから、今回包含層を検出できたのは、長崎鼻B地点と、長崎鼻C地点のみであった。特に長崎鼻C地点は良好な包含層が残されていることが確認されたことが大きな成果であった。

## 2 層 位

長崎鼻は周囲がほぼ砂に覆われ、地点によってはかなりの砂の供給があり砂が厚く堆積している。海岸線沿いは、ほぼ厚く砂が堆積しており丘陵上の内部、現在放牧場となっている部分は、玄武岩の赤褐色のロームがみえている箇所もあるなど、層位もかなり相違している。もともと玄武岩の溶岩台地上に古砂丘が乗って形成された長崎鼻は、土壤化の発達が少なく砂の互層で層が成り立っている。今回の調査地点でも砂層を主体に層位が形成されている。

TP 1・2 1・2層、削平後の埋土。3層、黄色の砂層で風成砂。4層、暗褐色砂層で3層より締まりがある。TP 1・2ともに遺物が数点出土している。5層は4層以上に締まりがある風化した小礫が混入する。6層は赤味がかった褐色の砂礫層で玄武岩の風化礫が混じる。(4層遺物包含層)

TP 3 1層、表土。2層、明褐色砂層。粒子が細かい風成砂。遺物はこの層中に包含され、下部で集積を検出。3層、褐色砂層。締まりがなく、4層の玄武岩風化礫が混入。4層、暗黄灰色砂層。やや締まりをもち、玄武岩の風化小礫を含む。5層、暗赤褐色砂層。地山に近く、風化礫を多く含む。(2層に遺物包含層)

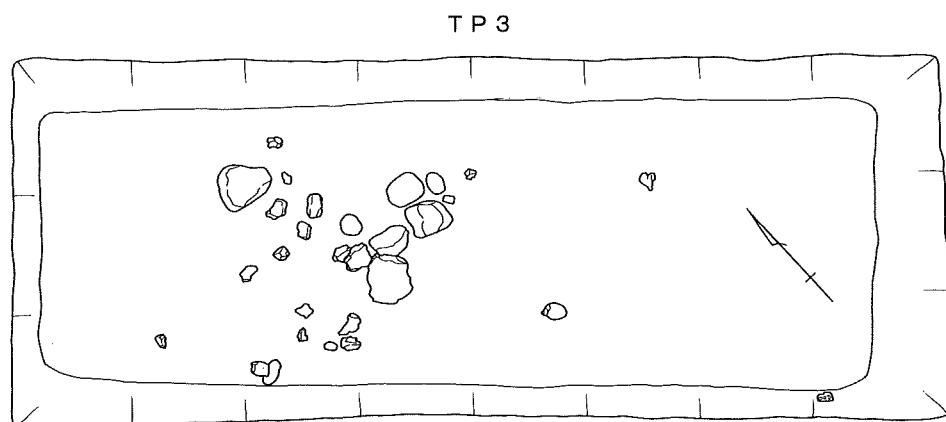
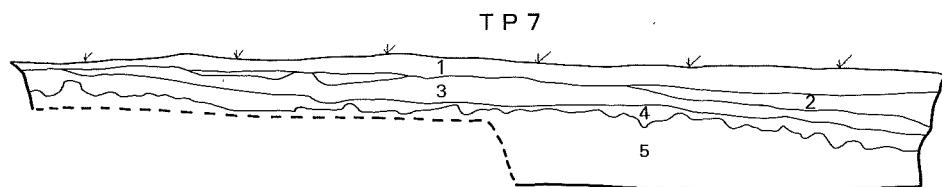
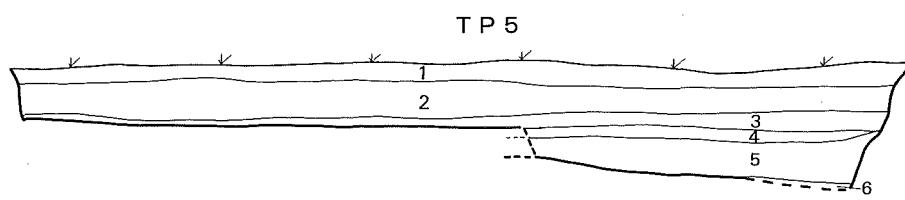
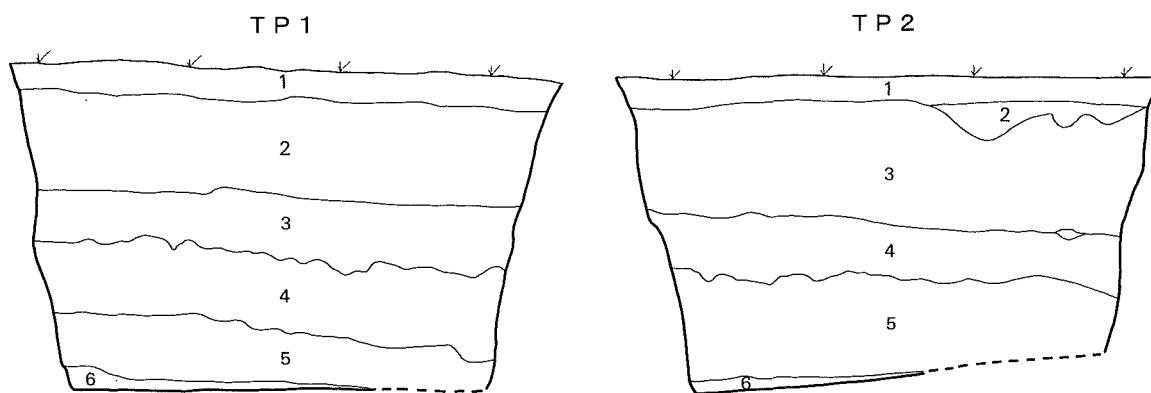
TP 5 1層、表土。2層、埋土。褐色砂層中に茶褐色粘質土が混入。3層、灰褐色砂層。やや締まりがあり粘質。4層、暗黄褐色粘質土。玄武岩風化礫を混入。5層、暗赤褐色粘質土。かなり締まっており玄武岩の小礫を混入。6層、黄褐色粘質土。下部に玄武岩の風化礫層(遺物の出土なし)

TP 7 1層、表土。2層、黄褐色砂層。サクサクし、乾燥しやすい。3層、暗黄灰色砂層。質的には2層と同。4層、灰黄色砂層。(5層の漸位層)。5層、赤味がかった灰褐色粘質土。玄武岩の風化礫混入。6層、赤灰褐色粘質土。玄武岩風化礫混入。(遺物の出土なし)

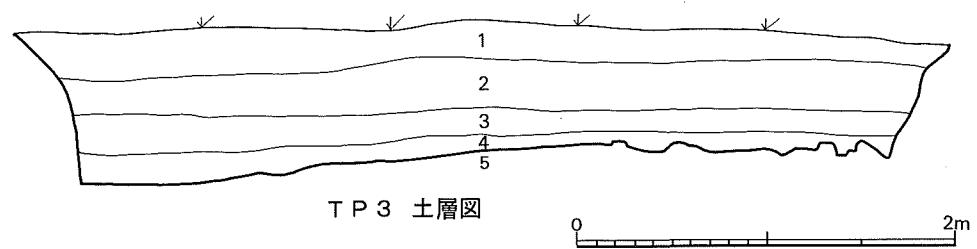
## 3 遺 構

遺構としてはC遺跡のTP 3から礫群が確認されている。礫群が大きな玄武岩の円礫を数個円形に配置し、その周辺から玄武岩の剥片・石核・土器等が出土している。この周辺に多くの遺構が存在することを示唆した。遺物間接合が見られるなど極めて元位置に近い状況の遺構と思われる。

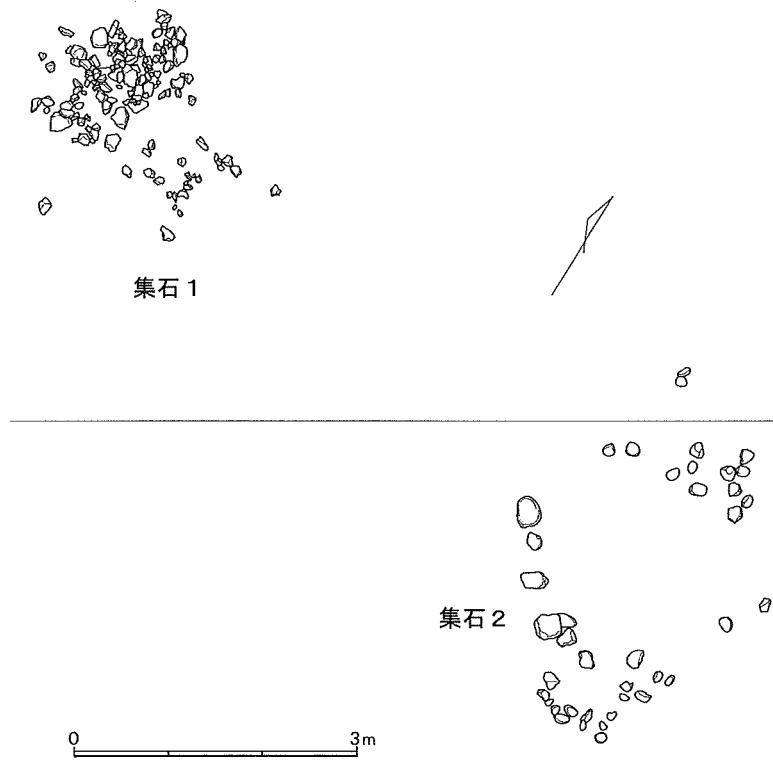
長崎鼻F遺跡には以前より、集石遺構が存在することが知られていた。この集石遺構は本来、砂に埋もれていたものが風成作用によって、上部の砂が飛ばされて現出したものと考えられていた。この



TP 3 集石遺構面実測図



第6図 土層図 ( $S = 1/40$ )



第7図 集石遺構 ( $S = 1/160$ )

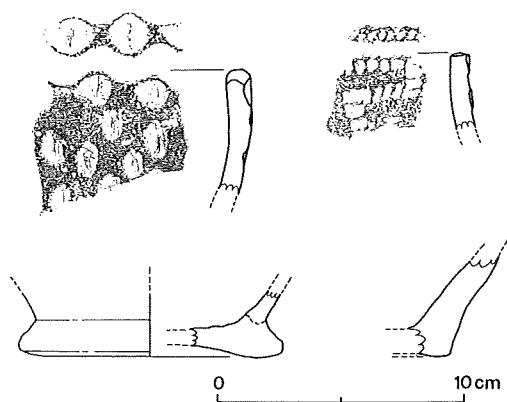
集石遺構は、ほぼ2つに分離できるものと考えられる。仮にこの二つを集石1と集石2として図化した。集石1は玄武岩の小形角礫で構成されており、一部に被熱痕が見られる。周囲の状況から、被熱については後生に受けた被熱であることも考えられるが、集石そのものは、周囲に敲石があることや、表面採集でこの周辺で多くの遺物が採集されているなどの状況から、縄文時代のものである可能性は高いものと判断する。集石2の状況は、集石1のような集中はみられないものの、円形状に礫が散乱した状況が見られる。散乱の状況は集中していた礫が後世に散乱した結果であろう。集石1と2は、集石1が角礫で構成されるのに対し、集石2は円礫で構成されるという相違が認められ、時間的な先後関係、機能的なものなどによる相違などが考えられるが、遺物等が確認されていないことから言及できない。周辺から採集された遺物や、TP3の炉址状遺構に近い状況などから縄文時代後期初頭頃のものと判断したい。

### 第三章 遺 物

出土遺物は他の遺跡での遺物が小片であるため、TP3・4から出土したものに限り実測し、説明を加えるものとする。

#### 1 土 器

TP3・4グリッドに集中していた。並木式土器と坂の下式土器のみで構成されている。1は坂の下式土器の口縁部破片である。指頭によって外面に圧痕を入れて紋様としている。口縁部の1段目の圧痕が最大で、口唇部にも同様な指頭圧痕を入れ、波状の口唇部としている。外面は赤褐色、内面は暗褐色を呈し、滑石を含む。2は並木式土器の口縁部である。口唇部に刻み目を入れ、口唇部外面も刺突によって周囲を巡らす。体部は棒状刺突具での浅い刺突を入れ、後に紋様間をナデている。滑石が大量に含まれており、胎土は暗茶灰色を呈する。他にも小破片が数点出土しているが、すべて滑石を大量に含んでおり、この2形式のどちらかに属するものと考えられる。なお、滑石の小破片が出土しており、土器が遺跡で製作された可能性を示唆する資料として特筆される。滑石の出土は小値賀島



第8図 土器 (S=1/3)

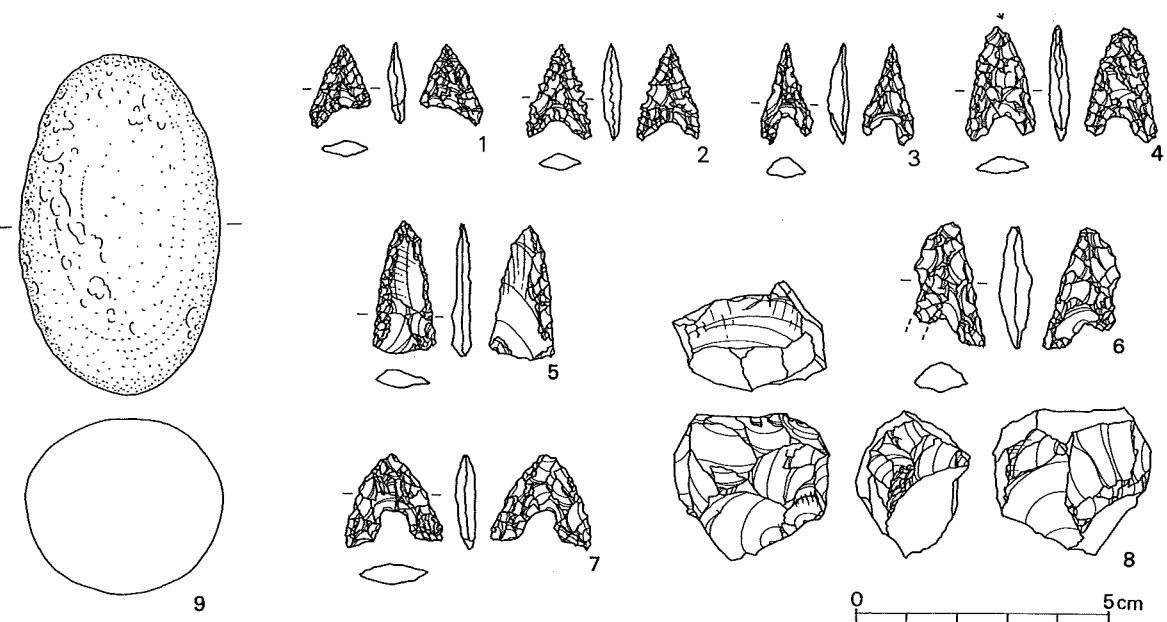
の殿崎遺跡でも知られており、土器が持ち込まれたのか、あるいは現地で焼成されたかの問題を考えるとき混和剤である滑石の出土は興味深いものがある。

## 2 石 器

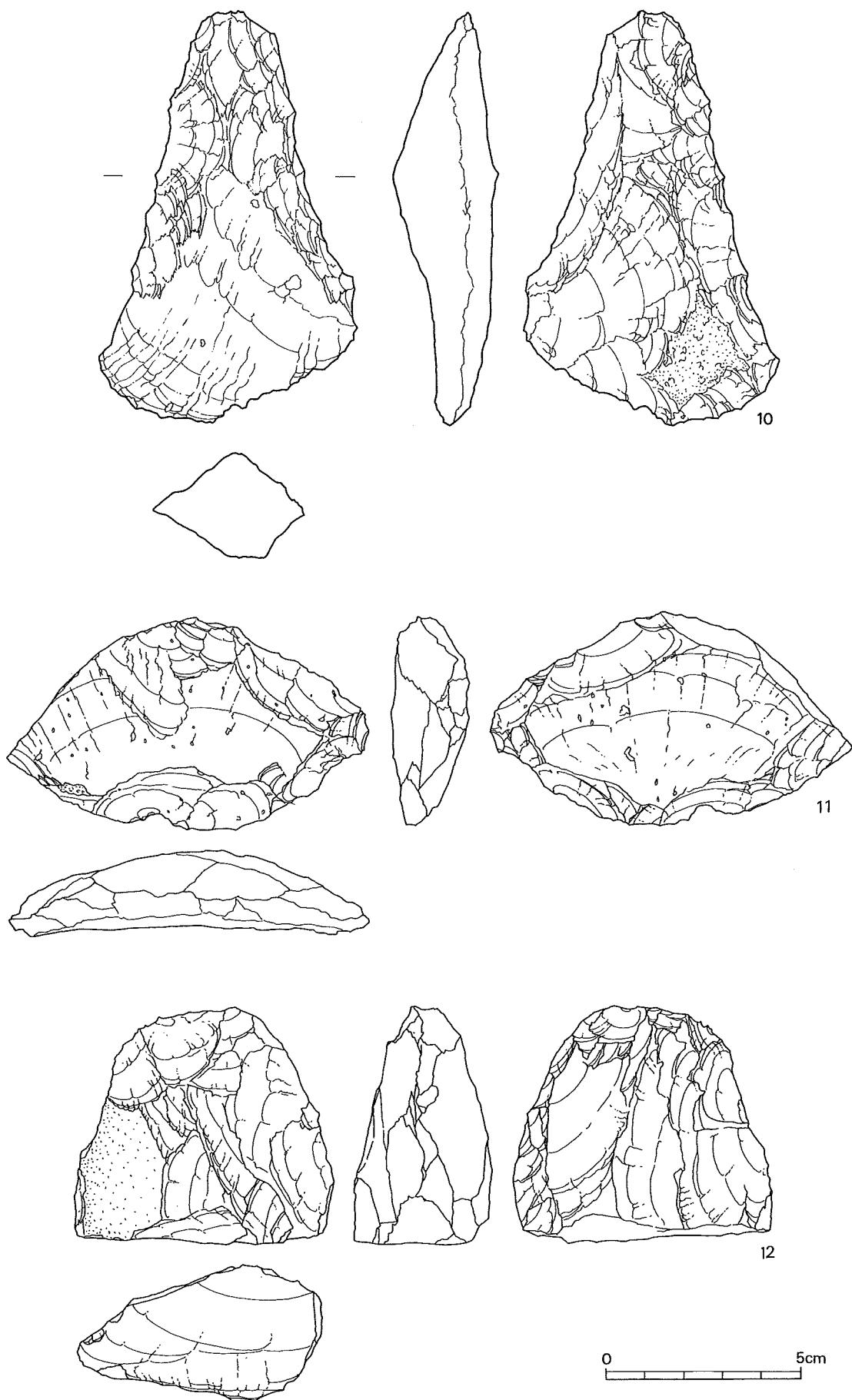
TP 3・4 グリッドに集中して出土したものを取り上げた。1・2・5は漆黒色の黒曜石を素材とした石鏸で、比較的小型であることに特徴を持つ。2は鋸歯縁を特徴とし、縄文後期初頭と考えられる小値賀島の殿崎遺跡のものと同じ形態である。5は主要剥離面を大幅に残し、周辺加工によって鏸としている。

いわゆる剥片鏸とは相違するが、石鋸の素材などと共に通する素材獲得方法を用いている。3・6は灰白色の黒曜石を素材としたもので、3はかなり先鋒に作られている。7は鉗形鏸で、通常縄文早期として位置付けられているが、本遺跡からは早期と思われる遺物はこの1点のみである。石核は黒曜石製のものは小型のものが目立つ。8の石核は青灰色の黒曜石素材で、剥離面状況から非常に小型の剥片を剥離したことがうかがえる。打面は上位にのみ設定しているが、下面も剥離面を打面として上下から剥離をおこなっている。図化していないがこのほかにも2点の小型石核が出土しており、2点とも自然面打面で、剥離面は一面のみである。

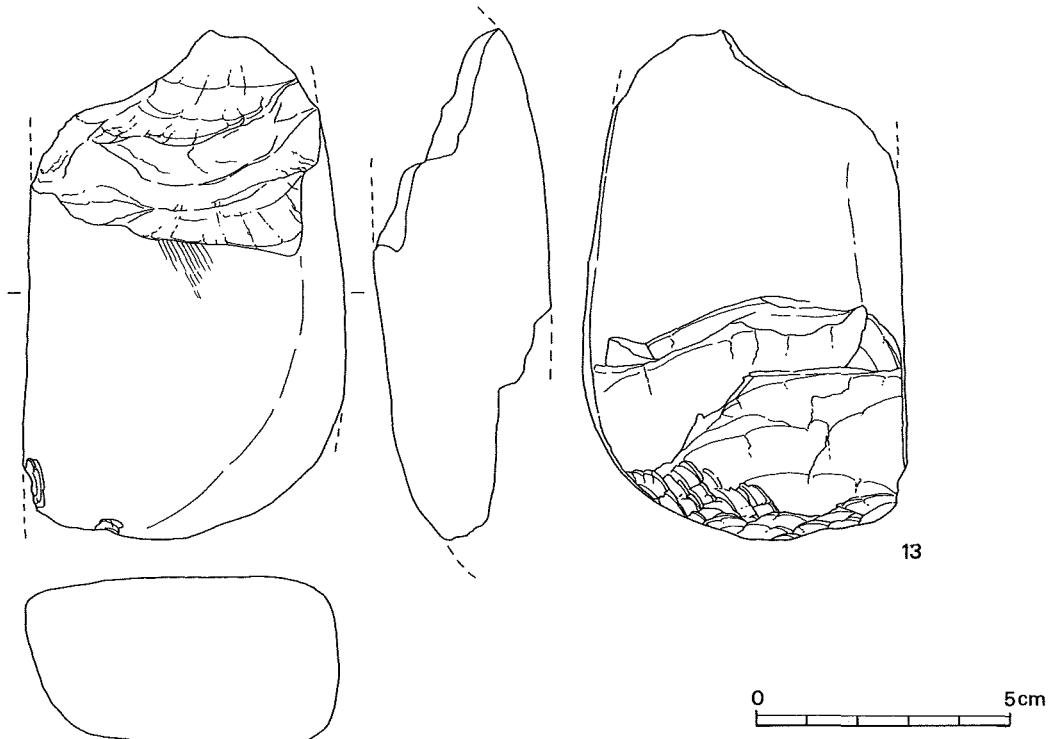
9は玄武岩製のハンマーで、6.8cmを測る小型のものである。玄武岩の石核、剥片が多量に出土していることから、そのハンマーとして利用されたものであろう。10は玄武岩製の搔器で、横長剥片の一端を加工して刃部としている。素材の玄武岩は、不純物が多く入るもので、現地の玄武岩を素材としているとおもわれる。玄武岩素材のものについては、現地調達というシステムが出来上がっていた



第9図 石器 (S=2/3)



第10図 石器 (S = 2 / 3)



第11図 石器 (S = 2 / 3)

であろう。玄武岩製の石器はこの他11の鎌崎型スクレイパーなどの大形石器に使用されているようである。11の鎌崎型スクレイパーは幅広の縦長剥片の打面側の両側片を加工し、刃部は一切手を入れずに素材の鋭利な部分を刃としている。この手の石器も縄文後期に顯著で、特に海岸部の遺跡に多いことが知られている。12は硬質砂岩を加工したもので、一部研擦痕が観察できるが用途については不明。13は玄武岩製の石斧の破損品であろう。

TP 3については、大形の石核や剥片が多量に出土するとともに、石器も出土することから石器製作をおこなった場として捉えた。14の接合資料は大形の円形の玄武岩礫を半割した状況を示すもので、さらに4分割したものを15のような石核にした工程が見て取れる。15も同様な工程の中で作られた石核であろう。このような一連の工程の中で、スクレイパーなどの大形石器が作られたことを示す好資料である。

## 第IV章 まとめ

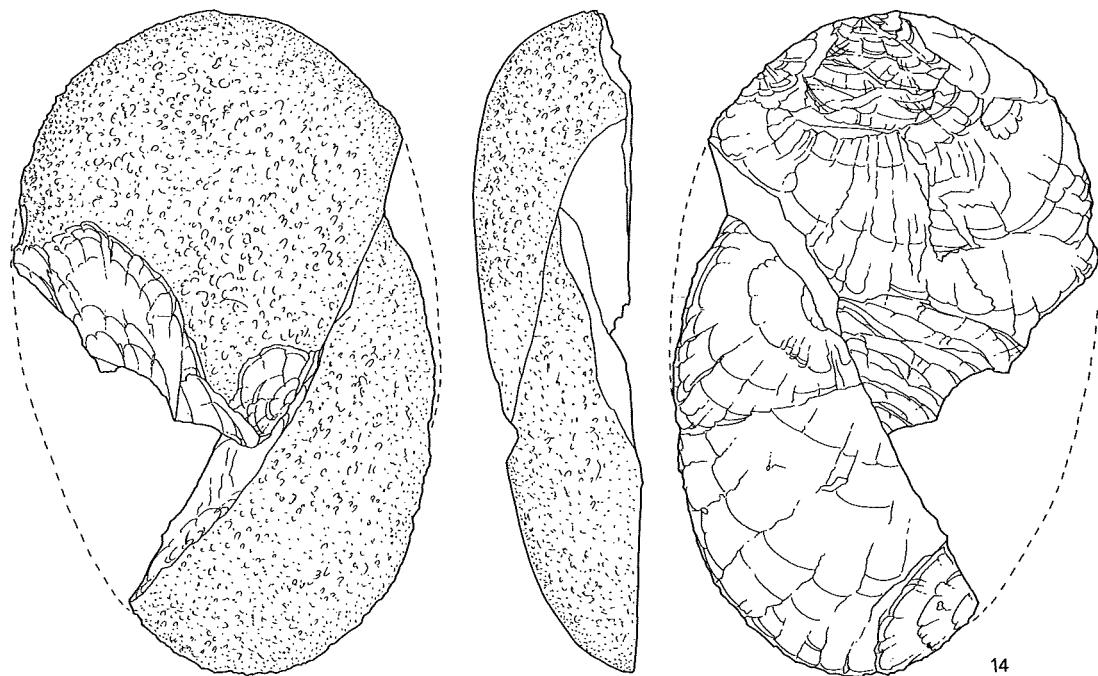
遺物については、ほとんどがTP 3出土である。TP 3から出土した土器は縄文後期初頭に位置付けられるもので、集石遺構を取り巻く当時の状況の一端を示す内容となっている。縄文後期初頭の西北九州は、漁労文化最盛期にあたり、石鋸・鋸歯尖頭器などの組み合わせ具が卓越する時期でもある。今回の調査では、石鎌・鎌崎型スクレイパーの他、石斧・スクレイパーなどを石器組成として持ち合わせており、ほぼ縄文後期初頭の石器組成と合致する。遺跡の規模としては、小規模と言わざるを得

ず、長崎鼻の周辺に転々と同様な遺跡を形成していた可能性がある。これらの小規模な遺跡は、季節的な漁場あるいは獵場の変遷を物語っているのではないだろうか。長崎鼻遺跡群は、表採遺物から旧石器時代から古代中世にまでおよぶ長い期間、遺跡が営まれていたことが既に知られていた。このことは低平な溶岩台地という立地条件が、生活を営むための好条件を備えていたということができる。

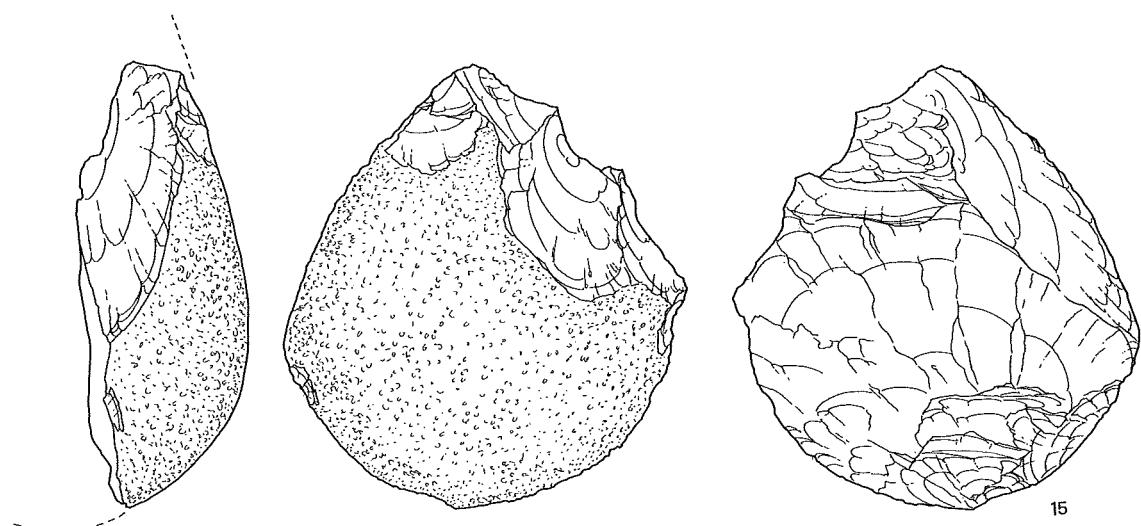
長崎鼻遺跡群は、広大な台地上にあり、現在確認されている遺跡数以上に遺跡数が増加する可能性がある。今後さらなる範囲確認調査等が必要となろう。

調査によって得られた所見をまとめてみる。

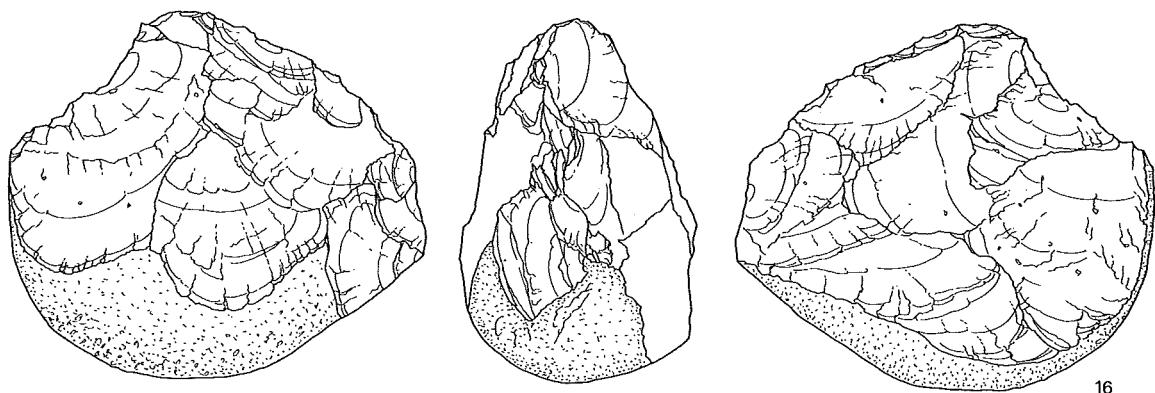
- ① 今回の調査により、長崎鼻B遺跡とC遺跡に遺物包含層が確認された。C遺跡については現在の道路部分を中心に包含層があり、放牧場内では包含層は確認出来なかった。ただし、放牧場内は広大であり、さらに調査の必要がある。また、B遺跡についても包含層の確認はできたものの、その範囲までは特定できていない。
- ② C遺跡の遺物内容から、遺跡の主たる時期は縄文後期初頭であることが理解できた。この時期の遺物は長崎鼻遺跡群では点々と確認されており、風による砂の移動が激しい中、周辺を移動しながら生活していた跡がこのC遺跡として残されたものと考える。
- ③ C遺跡での遺構と遺物から、集石遺構と剥片剥離作業との関係が緊密なものであったことを示唆する状況を確認できた。
- ④ A遺跡は今回調査坑を設定できなかつたが、切り通しの状況から旧石器時代の包含層が残る可能性が指摘される。
- ⑤ 積石塚2基は今回調査できなかつたが、古墳時代のものであれば五島列島の古墳文化を解明する上で重要な遺跡である。今後、積石が崩落していくことを考えれば、整備を念頭に入れながら調査を検討する必要があろう。



14



15

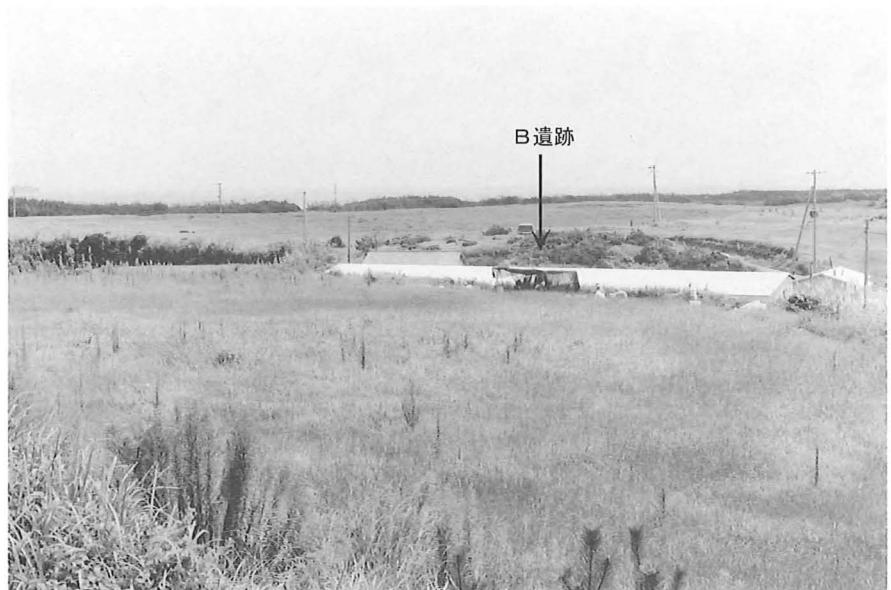


16

第12図 石器 ( $S = 1/2$ )

# 図 版

(長崎鼻遺跡)



図版 1 遺跡遠近景

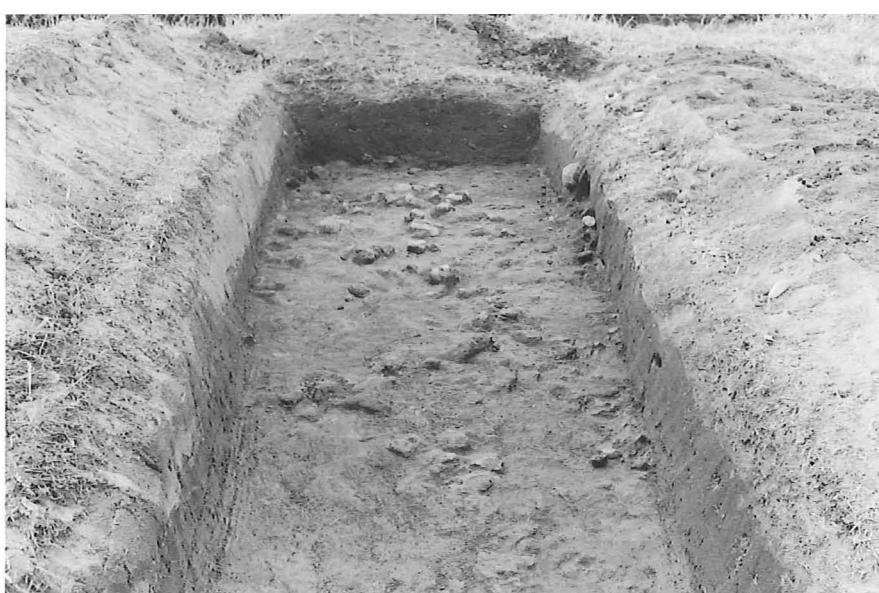
図版 2



TP 1



TP 3

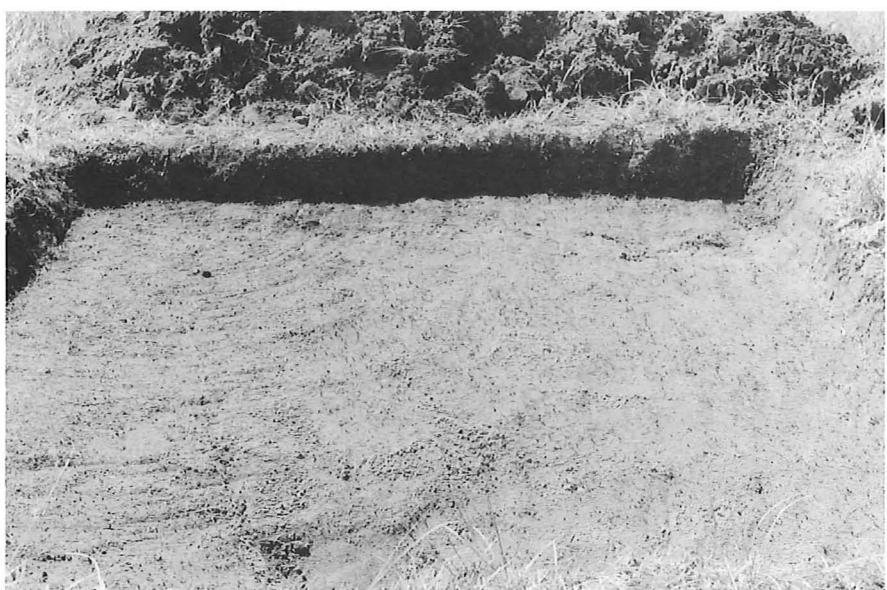


TP 3 完掘状況

図版 2 土層の状況



TP 8



TP 10 完掘状況



積石塚 A  
西側より撮影

図版 3 土層の状況及び積石塚 A

図版 4



C 遺跡 T P 3  
出土の集石遺構



F 遺跡確認の集石 1



F 遺跡確認の集石 2

図版 4 集石遺構



石斧出土状況



鎌崎型スクレイパー出土状況



坂の下式土器出土状況

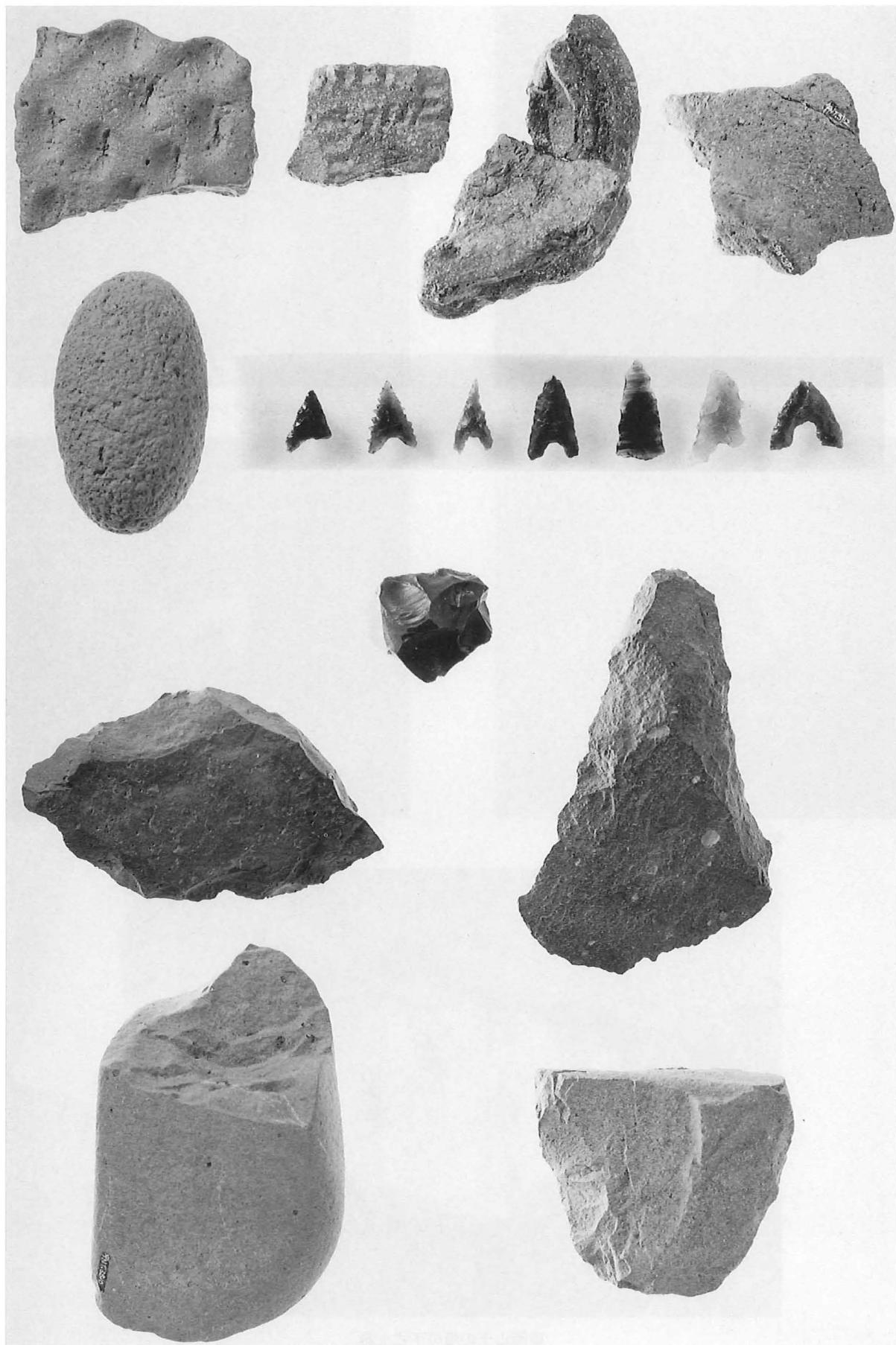


石鏃出土状況



壁面出土の坂の下式土器

図版 5 遺物出土状況 (T P 3)

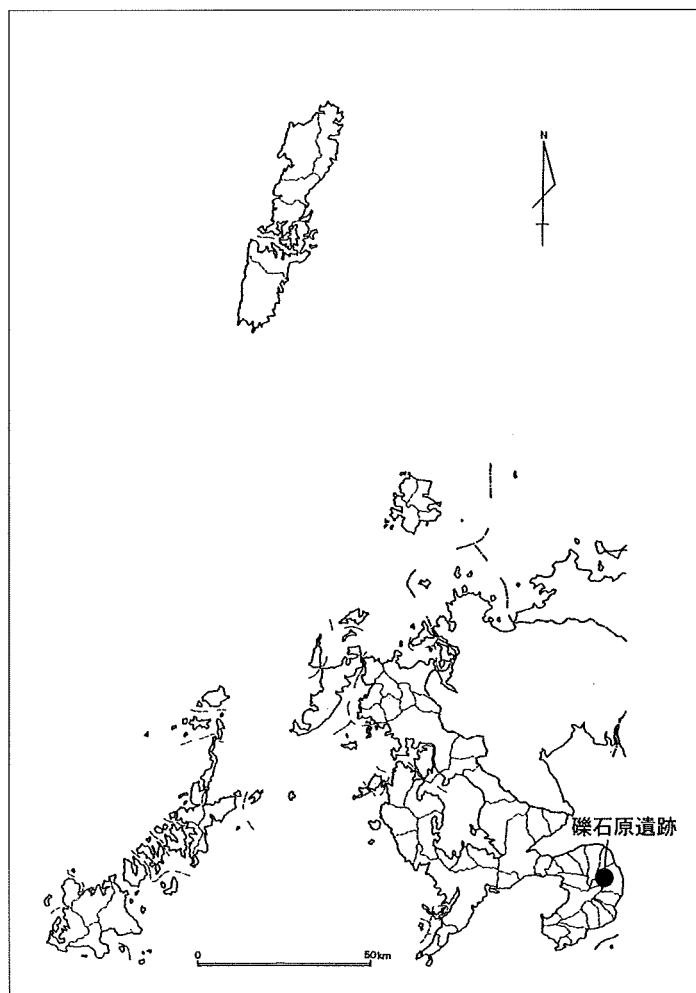


図版 6 遺 物



図版 7 遺 物

## 第Ⅱ部 磯石原遺跡



## 例　　言

1. 本書は長崎県島原市礎石原町に所在する礎石原遺跡の調査報告書である。
2. 調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり、島原市教育委員会の協力をえて、平成12年11月13日から12月8日まで実施した。
3. 遺物実測およびトレースについては佐藤いづみ、渡辺洋子の協力をえた。
4. 本書における遺物・写真・図面などは長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。
5. 本書の執筆・編集は古門がおこなった。

## 本　文　目　次

第Ⅰ章 地理的歴史的環境 .....	32
第Ⅱ章 磯石原遺跡の調査履歴 .....	33
第Ⅲ章 調査の概要 .....	36
第Ⅳ章 遺　物 .....	42
第Ⅴ章 まとめ .....	46

## 挿　図　目　次

第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000) .....	32
第2図 調査の履歴 .....	33
第3図 調査地位置図① (古田1977より) .....	34
第4図 調査地位置図② (S=1/5,000) .....	35
第5図 第3試掘坑南壁 (S=1/40) .....	36
第6図 第2試掘坑北壁 (S=1/40) .....	36
第7図 試掘坑配置図 (田浦氏私有地) S=1/600 .....	37
第8図 第2試掘坑遺構平面図 (S=1/60) .....	37
第9図 第3試掘坑遺構平面図 (S=1/60) .....	38

第10図 調査区配置図（石橋氏私有地） $S=1/600$	39
第11図 第5試掘坑北壁（ $S=1/40$ ）	40
第12図 第6試掘坑西壁（ $S=1/40$ ）	40
第13図 第5試掘坑遺構平面図（ $S=1/60$ ）	41
第14図 繩文土器実測図（ $S=1/3$ ）	43
第15図 石器実測図（ $S=2/3$ ）	45

## 図 版 目 次

図版1	49
図版2	50
図版3	51

# 第Ⅰ章 地理的歴史的環境

島原半島北東部は雲仙岳の麓から有明海に向かって緩やかな裾野を形成している。火山性山麓扇状地とよばれる地形で、雲仙火山初期の大噴火によって形成された。雲仙火山の基底をなすことから地質学的には「雲仙基底火山碎屑岩」と称されている。別名「竜石層」ともいわれ、約25万年前の堆積である（註1）。

礫石原遺跡は島原市と南高来郡有明町にまたがる、面積約150万m<sup>2</sup>の広大な遺跡である。遺跡の立地する地形は、ゆるやかに北東へ傾く火山性山麓扇状地で、舞岳の東側谷口から北東へ広がる礫石原山麓地にある。

遺跡の発見は第2次世界大戦後の開拓によって、遺物などが掘り起こされ、在野の考古学研究家古田正隆氏が目にとめ、氏によって学界に紹介された。隣接する遺跡としては後期旧石器から縄文時代晩期におよぶ百花台遺跡群がある。

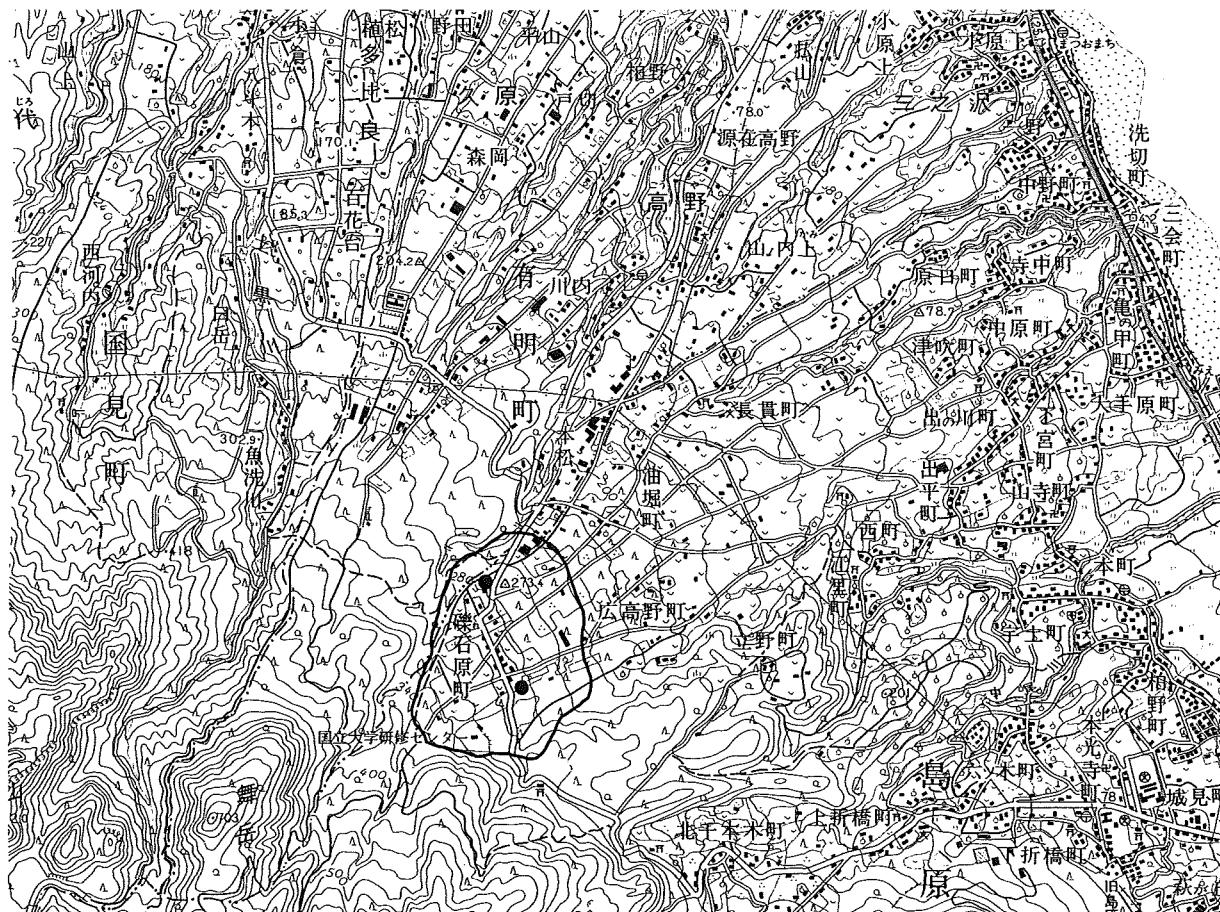
今回の調査地は田浦金恵氏宅に隣接する畠地（標高約280m）と、昭和36年に日本考古学協会の西北九州総合調査特別委員会が調査をおこなった地点に隣接する地域（石橋氏所有）の調査をおこなった。

## 【註】

註1 島原半島北部に立地する遺跡の地理的考察として久原巻二氏の詳細な研究がある（久原1994）。

## 【引用・参考文献】

久原巻二1994「地理的歴史的環境」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第116集



第1図 遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

## 第Ⅱ章 磯石原遺跡の調査履歴

磯石原遺跡は過去、何度か調査が行われている。ここでは過去の主な調査履歴を列記しておく。

### 1. 日本考古学協会の調査（鏡山ほか1962）

日本考古学協会の西北九州総合調査特別委員会による本調査が1961年（昭和36）に行われている。

第1遺跡と第2遺跡が調査された（註2）。

### 2. 1978年（昭和53）の調査

磯石原県民憩の広場（現在の磯石原公園）の建設にあたり、遺跡が損壊され長崎県教育委員会によって11月14日から同月16日にかけて遺物採集調査が実施された。縄文晩期を中心とする土器（約2,500点）と石器（約500点）が出土した。

### 3. 1987年（昭和62）の調査（町田・浦田1988）

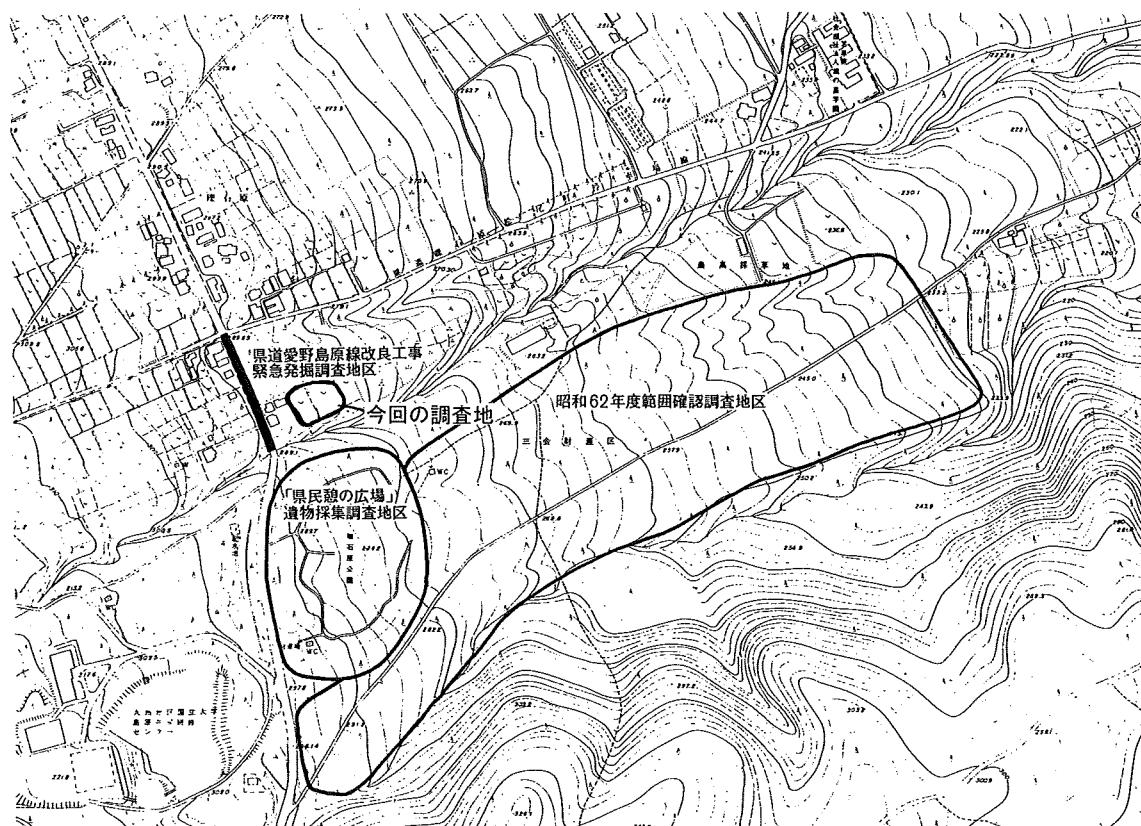
同年8月25日から9月26日にかけて島原市教育委員会と長崎県教育委員会が国庫・県費の補助をうけ、公有地（三会地区財産区）について範囲確認調査を実施している。財産区は公有地でひのき林となっていた。面積は138,089m<sup>2</sup>におよぶ。縄文時代の遺構は検出されていない。

### 4. 1991年（平成3）の調査（副島・町田1991）

県道愛野－島原線改良工事に伴い、緊急発掘調査が行われた。工事は排水用の長さ120m×幅2mの暗渠を敷設するものであった。したがって調査区は細長いものとなった。縄文時代の遺構は検出されていない。

#### 【註】

註2 第1遺跡とは第3図のS, R地点を含む地区と思われる。第2遺跡は第1遺跡に隣接とあるが（鏡山ほか1962），詳細は本報告が行われていないために不明である。



第2図 調査の履歴

## 5. 1993年（平成5）の調査

1993年（平成5）に島原市教育委員会によって、礫石原地区の北部の農道改修とともに緊急発掘調査が実施された。範囲確認調査を8月30日から9月7日、本調査を12月8日から24日かけて実施している。

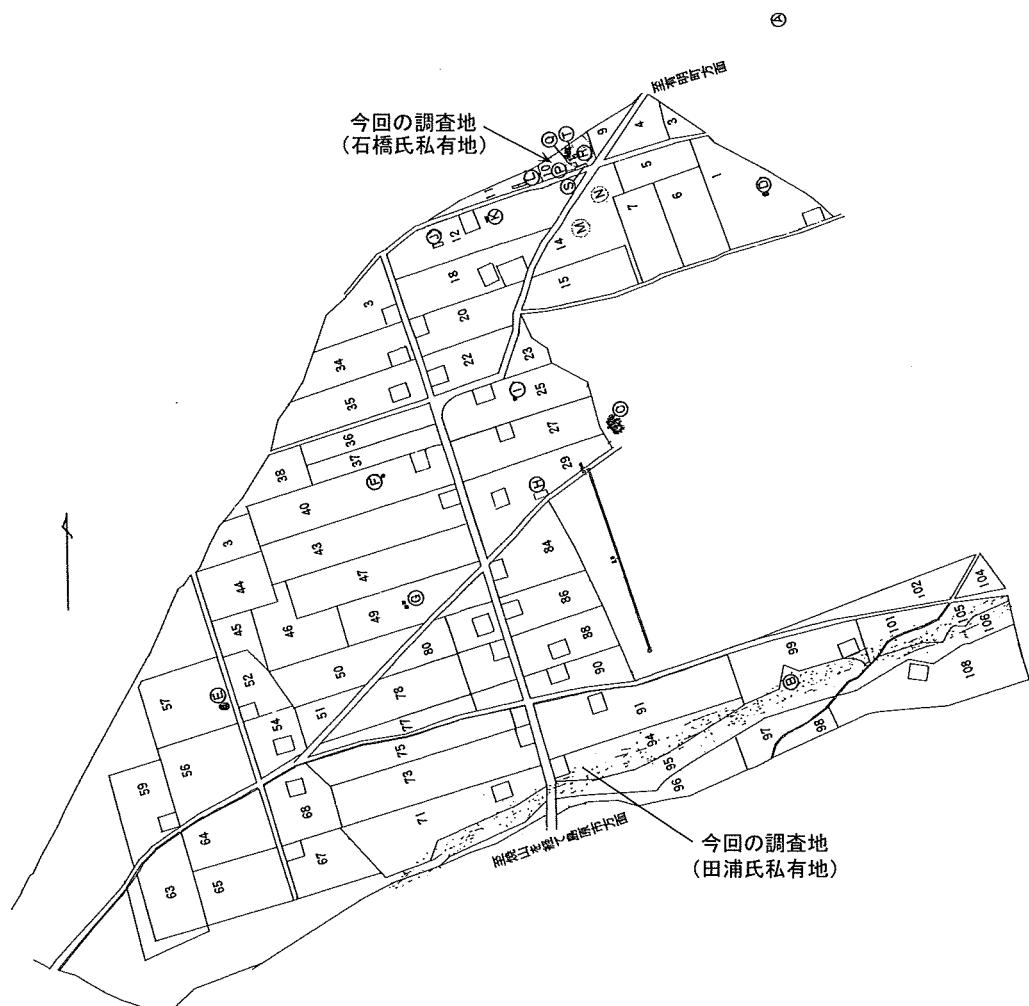
## 6. 1997年（平成9）の調査

1997年11月12日から12月10日まで、島原市教育委員会によって社会福祉法人幸生会身体障害者療養施設建設に伴って、緊急発掘調査が実施された。

## 5. 過去の調査地との整合性について

今回の調査地である田浦金恵氏宅は1991年に実施された、県道愛野一島原線改良工事に伴う調査地の隣接地である。また1978年調査の礫石原公園にも隣接し、1987年調査の三会地区財産区にもほど近く、同一地域といってよい。

一方、石橋氏所有の調査地は1961年（昭和36）の日本考古学協会が調査した場所の隣接地である。田浦氏宅からは北へ800mほど離れたところにある。



第3図 調査地位置図①（古田1977より）



第4図 調査地位置図② (S = 1 / 5,000)

## 第III章 調査の概要

### 1 磯石原遺跡の土層について（第6図）

調査地の土地所有者である田浦氏のお話によると、磯石原地区の開拓に関わられた経験から、磯石原地区の土層は表層より、「黒ボク・黄（きな）ボク・パミスを含んだ黒色土・岩（がん）」であるという。かつては黒ボクの層厚は1mを超えるほどであったという。

今回調査をおこなった田浦金恵氏の畑の土層も基本的に上記のような層序をなす。今回の土層について述べる前に過去の磯石原遺跡の調査報告書より土層についての記述を検討したい。

#### （1）1987年（昭和62）の調査における土層

報告（町田・浦田1988）では基本層序を5層に分けている。

第1層 表土（厚さ5cm前後）

第2層 黒色火山灰土 さくさくしており軟質（厚さ10cm前後）

第3層 きめの細かい火山灰土で、色調により淡黄灰色軟質土層（3a層）と黄褐色軟質土層（3b層）がある。縄文晩期の包含層（厚さ15~80cm）。

第4層 黒色火山灰土。軟質。（厚さ10~60cm）。4層下部に5~10cmの範囲にわたって茶褐色のパミス（軽石）を含む層（カシノミ層）が検出。遺物は3層との境から4層上部にかけて数点出土。

第5層 地山。灰黄色礫層。極めて硬質。4~5層には、巨石および多くの礫を含む地点がある。

「土層では、百花台遺跡との対比で、磯石原3a、3b層が2層にあたり、遺物の上からも同様な出土状況を示している。次に磯石原4層が百花台3層となる。」

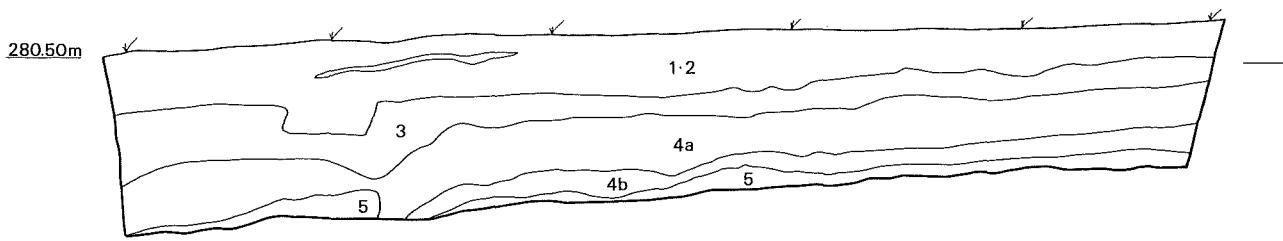
#### （2）1990年（平成2）の調査における土層

1991年報告（副島・町田）でも基本層序を5層に分けている。

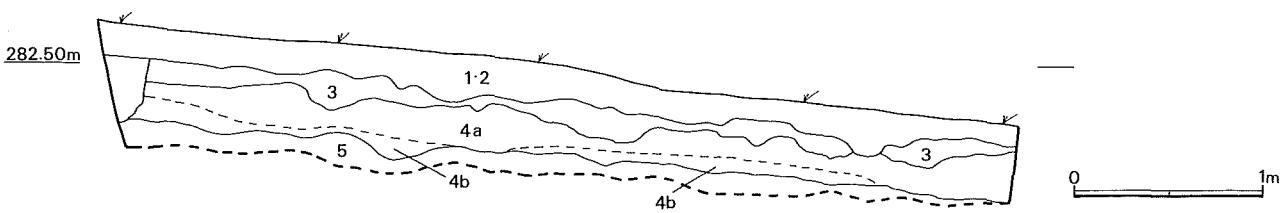
第Ia層 暗茶黒色土

第II層 黒色土の火山灰が堆積し、遺物は主にこの層から出土している。

第III層 黄色味が薄いIIIa層（暗灰黄色）と黄色味が濃いIIIb層（黄褐色）



第5図 第3試掘坑南壁 ( $S = 1/40$ )



第6図 第2試掘坑北壁 ( $S = 1/40$ )

遺物はⅢa・Ⅲb層から17点出土があった。

第IV層 パミスを含んだ層で、茶色味が濃いIV層（暗茶色）と黒色が濃いIVb層（淡黒色）があった。

遺物の出土はない。

第5層 灰黄褐色礫層。遺物の出土はない。

### (3) 今回の調査における

#### 土層

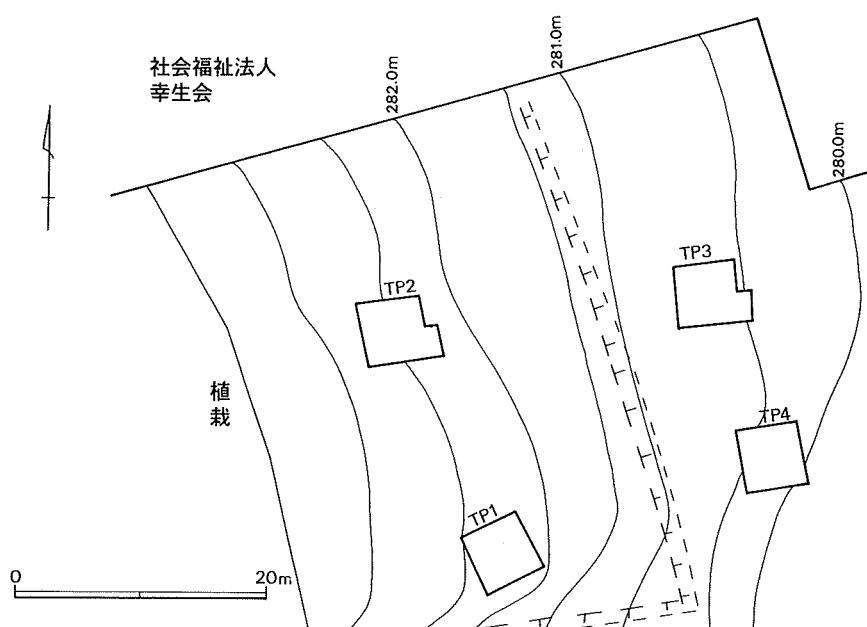
田浦氏宅の調査区（TP2および3）の土層は基本的に過去の調査と同様である。

**【第1・2層】**表土および黒ボク層である。開拓後の土壤流出によって黒ボクがかなり流れしており、土層の厚さはきわめて薄く、両者を一括してあつかった。縄文晩期の土器を出土する。

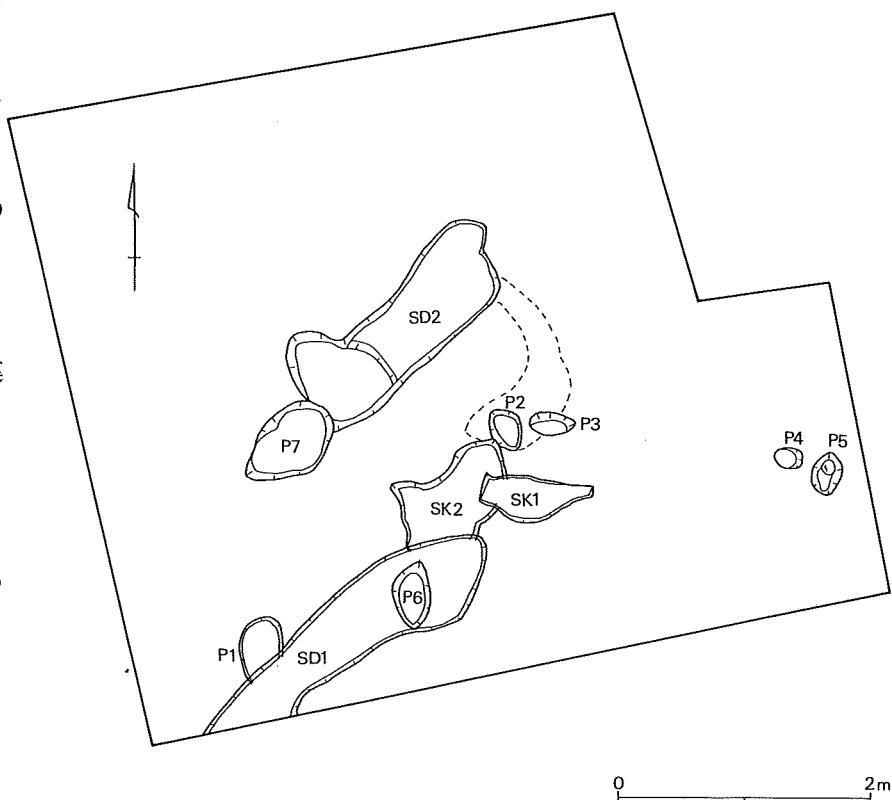
**【第3層】**黄橙色火山灰土である。アカホヤを含む層と考えられる。土質はサラサラとしており、縄文早期の土器を出土する。

### (4) 過去の調査の土層との整合性

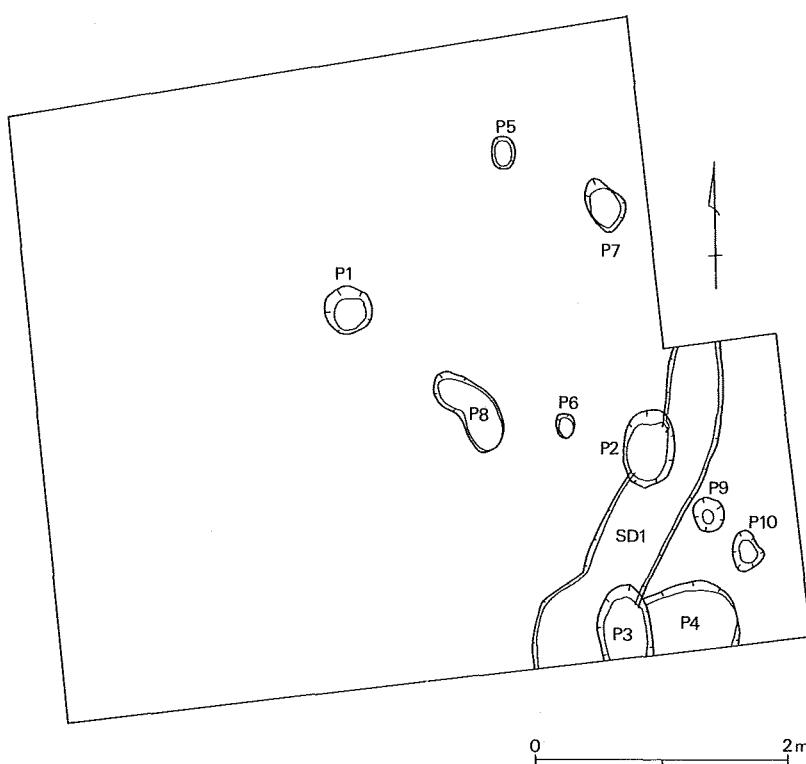
前述したように88年報告と91年報告の土層は、表記の違いはあるものの、地元でいうところの「黒ボク・黄（きな）ボク・パミスを含んだ黒色土・岩（がん）」に一致するものと考えられ、今回の調査でもほぼ同様な土層堆積をみることができた。第1層を表土として、第2層を黒ボク、第3層を黄（きな）ボク、第4層



第7図 試掘坑配置図（田浦氏私有地）S = 1 / 600



第8図 第2試掘坑遺構平面図 (S = 1 / 60)



第9図 第3試掘坑遺構平面図 ( $S = 1/60$ )

彦の研究がある（長岡・田島1998）。

これらの研究を参考に礫石原遺跡の土層をみてみると、礫石原5層は礫石原火碎流（14,000～19,000年前）に、礫石原3層は鬼界アカホヤ降下火山灰（6,700～6,300年前）を含む層（アカホヤは二次堆積の可能性がある）とみられる。礫石原4層はいわゆる「カシノミ層」があるが、長岡らはこれを「雲仙細粒降下火山灰」と命名し、2種類の火山灰を認識している。また礫石原3層がいわゆる「百花台遺跡の第2層」に相当すると考えられる。

## 2. 調査区の設定

田浦氏宅の畑に4箇所の試掘坑を設定した。各試掘坑は $5\text{m} \times 5\text{m}$ とした。

## 3. 各試掘坑の状況

### （1）TP1の状況

表土下30cmほどで礫石原5層があらわれる。しかも調査坑の南側は耕作用の通路によって攪乱をうけていた。そのため、早々に放棄した。

### （2）TP2の状況

土層は基本土層をなす。礫石原3層上面で遺構の検出をおこなった。遺構は溝状遺構とピット、土坑などである。溝は南北方向に縞状に直線的に数条並んで検出された。幅は5cm～30cmとさまざま

をパミスを含む黒色土、第5層を岩（がん）とすることができる。したがってここでは過去の調査による土層を統一して、それぞれの層位の前に遺跡名である礫石原を冠し、「礫石原2層」、「礫石原3層」などと呼称することにしたい。

なお、礫石原4層の上層にはパミスを含まないか、パミスの量が少ない土層が、TP3などに確認できた。

### （5）最近の火山灰研究との整合性

最近の島原半島における火山灰研究は長岡信治らによって精力的に行われている。とくに雲仙北麓の火山灰については長岡と田島俊彦の研究がある（長岡・田島1998）。

である。埋土は第2層起源の土壤である。開拓後の耕作によるものと判断した。

礫石原3層除去後、4層上面で溝状遺構を検出した（SD1）。埋土は3層起源のものである。したがって時期は縄文前期以後で晩期以前である。人為的な溝というよりは、沢状の自然地形と判断した。同様の時期のものでピット6基（P1～P6）を検出した。

3層と4層の境界付近の層より山形押型文土器片を出土した。

（3）TP2の遺構：遺構の形成は古い時期からSD2→P7→P1～6→SD1→SK1である。

### SK2

#### ① P1～P6, SD1

3層のある時点から4層に切り込んでいる。ピット（小穴）内の埋土は3層起源のものである。したがって縄文前期以降、晩期以前である。

#### ② SK1

1・2層のある時点から3層に切り込んでいる。埋土は1・2層起源のものである。したがって縄文晩期以降の時期である。ピットの形状から樹痕と考えられた。

#### ③ P7

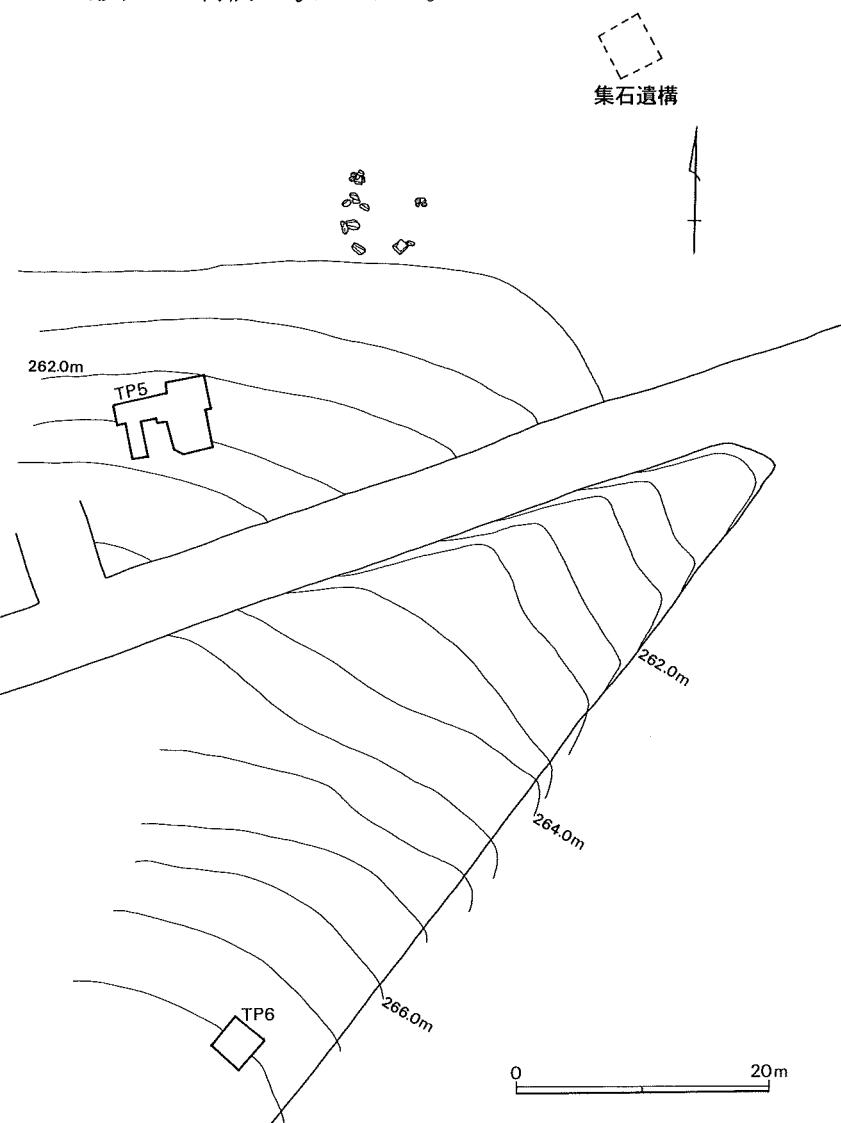
4層のある時点から5層を  
切り込んでいる。埋土は4層  
である。

#### ④ SD2

4層に切り込んでいる遺構  
である。埋土はパミスが少な  
く黒色が強いので4b層起源  
と考えられる。したがってTP  
2の中では最も古い、縄文  
早期以前である。しかし、5  
層をすべて露出させたところ  
で検討したところ、5層上面  
の起伏が激しく、SD2は5  
層上面の起伏に沿って生じた  
ものであることが判明した。  
したがって、SD2は自然地  
形である。

#### （4）TP2の遺物

基本的には1・2層からと、  
3層までは縄文晩期の土器が



第10図 調査区配置図（石橋氏私有地）S=1/600

出土する。3層下部からは押形文土器が出土し、4層上面（4a層）では縄文早期の貝殻条痕文土器が出土するようである。

#### (5) TP 3 の状況

TP 2 と同様に3層上面で南北方向に走る溝状遺構を検出した。そのほかにピット、土坑などを検出した。

また3層以下の土層を切って白黄色の硬質火山灰層が貫入している。調査作業員の鍬の歯がたたないほど硬質である。島原市教委の土橋氏によると、島原市内の調査では時折みられるという。

3層と4層（カシノミ層）の間にパミスの含有量が少ない黒色土が存在するので4層をふたつに分層して4a・4b層とし、本来のかしのみ層を4bとした。TP 2 では調査中には認識できなかったが、土層の観察より、TP 3 と同様に存在することが判明した。

#### (6) TP 3 の遺構

古い時期の遺構よりP 9, 10 → SD 1 → P 5 ~ 8 → P 1 ~ 4 である。

#### (7) TP 3 の遺物

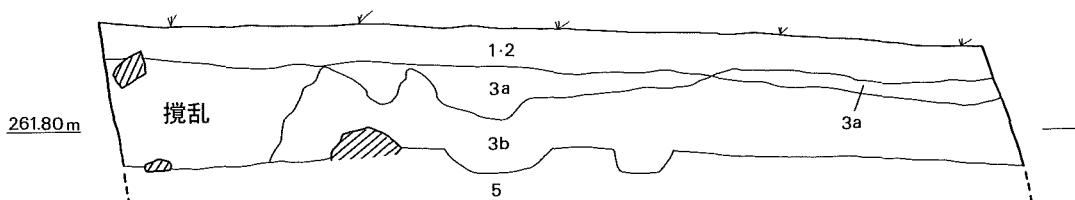
遺物の出土量はTP 2 に比較すると極めて少ない。

#### (8) TP 4 の状況

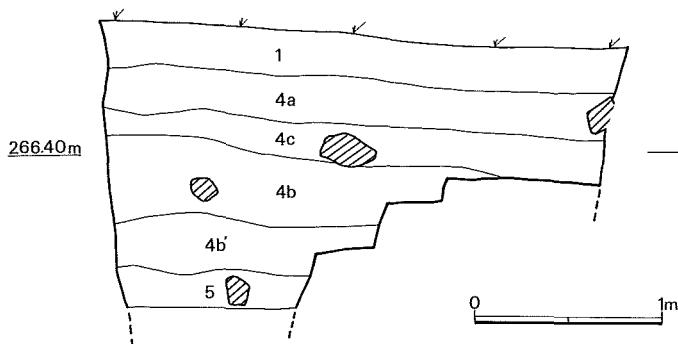
TP 1 と同様に攪乱をうけており、第3層、4層は失われている。第5層が高い位置で露出する。そのため早々に放棄することとなった。

#### (9) TP 5 の状況

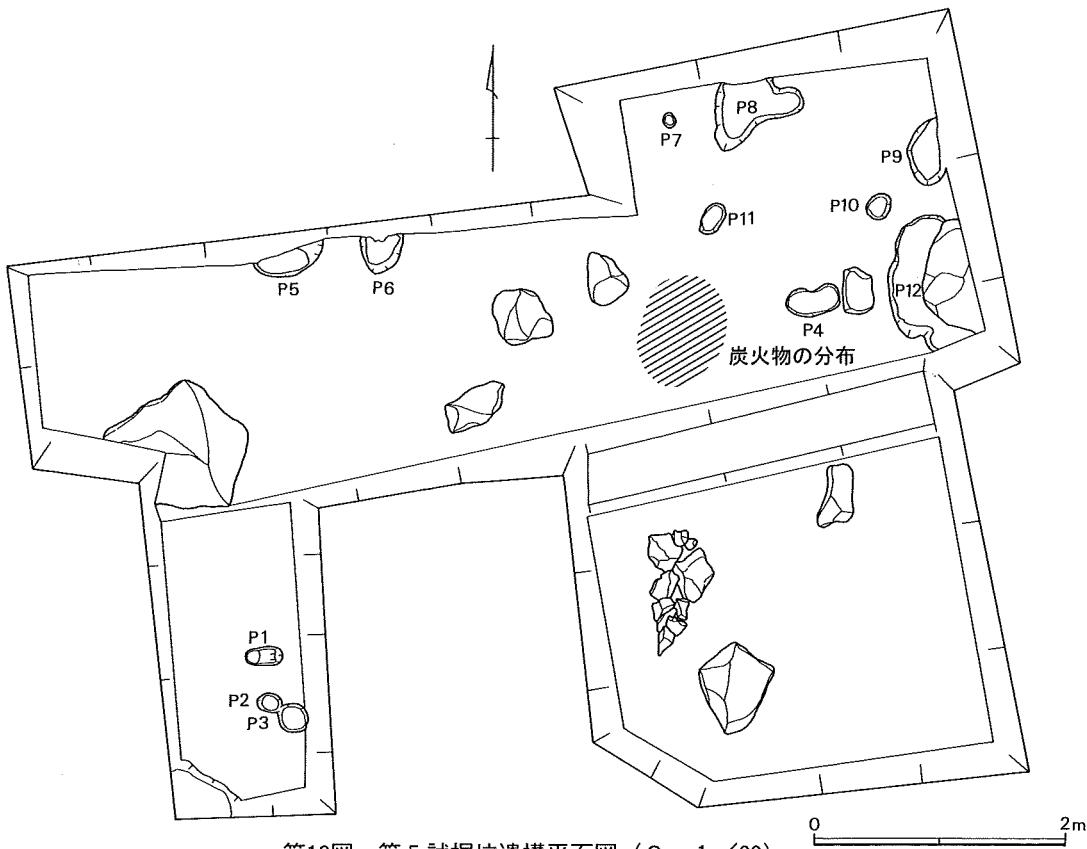
1・2層は薄く、層厚は20cmほどである。1・2層を除去すると、3層があらわれるが、田浦氏宅でみられる3層とは異なり、上層（3a層）は明度が落ちる。黄色味が少なく、褐色土層に近い。下層（3b層）は暗茶褐色土層で、バサバサで締まりがなく、パミスをほとんど含んでいない。斑状



第11図 第5試掘坑北壁 ( $S = 1/40$ )



第12図 第6試掘坑西壁 ( $S = 1/40$ )



第13図 第5試掘坑遺構平面図 ( $S = 1/60$ )

に黒茶褐色を呈する部分がみられる。

遺構はピット（小穴）のみである。いずれも3層と5層上面で検出した。3層で検出したものは4基、5層上面で検出したのは6基である。

また層状に黒茶褐色が堆積した部分があり、遺構のように思われたが、明瞭な掘り込みラインは認められず、モヤモヤと不明瞭なまま消滅してしまった。

従来ある4層の「かしのみ層」は、このTP5ではほとんど見られなかった。5層の直上に最大5cm、くらい堆積しているのがうかがえる部分もあるが、これらはほとんど局所的なもので、整合状態で堆積しているものではない。

遺構としては小穴（ピット）を14個確認したのみである。P1～P4までは第3層で検出し、P5以下のピットは第3層除去後の第5層上面で確認した。

#### (10) TP6の状況

表土下は3層は存在せず、4層が表れる。いわゆる「かしのみ層」であるが、パミスの多少によって3つに分層できそうである。層厚も1mほどもあり、厚い。4a層は田浦氏宅で確認したもので、パミスを含まない黒色土である。その下の4c層もパミスをあまり含まない。その下の4b層とした部分がかしのみ層である。その下の4b'層も4b層よりパミスの量が極端に少なくなる。5層は礫石原火碎流である。

遺構はまったく検出することはできなかった。

## 第IV章 遺 物

### 1 縄文土器

出土した土器は縄文早期の押型文土器、条痕文土器、縄文晚期前半の土器である。

#### (1) 縄文早期の押型文土器（第14図1～6）

1～4は山形、5は楕円の押型文土器である。1は口縁部片で、外面には横走する山形文、内面には縦走する山形文を施文する。今回出土した押型文土器は山形文や楕円文が粗雑であるところから押型文土器でも後半の時期と考えられる。6は縦走する隆線文より手向山式土器と考えた。1～3は第2試掘坑の第4層（樋のみ層上面）、5は第3層（アカホヤ2次堆積層）、4は第3試掘坑の第4層、6は第2試掘坑第4層より出土した。

#### (2) 縄文早期の条痕文土器（第14図7～12）

7は直口する口縁をもち、内外面に貝殻条痕を施している。外面は横走する地紋の条痕の上から斜行する条痕を施し、文様化している。口唇部には外からの刻目文がある。この種の土器は塞ノ神式土器の後続型式と考えられ、高橋信武氏の「右京西式」（高橋編1986）、池田朋生氏の「轟A式」（池田編2001）の範疇に入るであろう（註1）。8～11の土器も表裏面ともに貝殻条痕文の土器片である。胎土、色調より、晚期の粗製の貝殻条痕文土器ではなく、早期末の条痕文土器と判断した。13は底部片である。胎土、色調より早期の土器と判断した。

7、11、12、13は第2試掘坑の第3層、8は第3試掘坑の第3層、9は第2試掘坑の第4層、10は第2試掘坑の第1・2層（黒ボク）、から出土している。

#### (3) 縄文晚期前半の土器（第14図14～23）

縄文晚期前半の土器の口縁部と認識した資料である。九州では古閑式土器、大石式土器とよばれる土器型式で、島原半島では島原市畠中遺跡、同市肥賀太郎遺跡などで出土例がある。

14～16は口縁部が「く」の字状に外反し、外反部を文様帶として横走する沈線文をめぐらす資料である。17は同型式の胴部資料である。18～21は条痕調整の土器である。20は早期末の条痕文土器の可能性もある。22、23は浅鉢形土器片を示した。

14～16、21は第5試掘坑の第1・2層から出土し、17は同試掘坑の表採である。18～20は第3試掘坑の第3層、22は第5試掘坑の第1・2層、23は第3試掘坑の第3層より出土した。

#### (4) 小 結

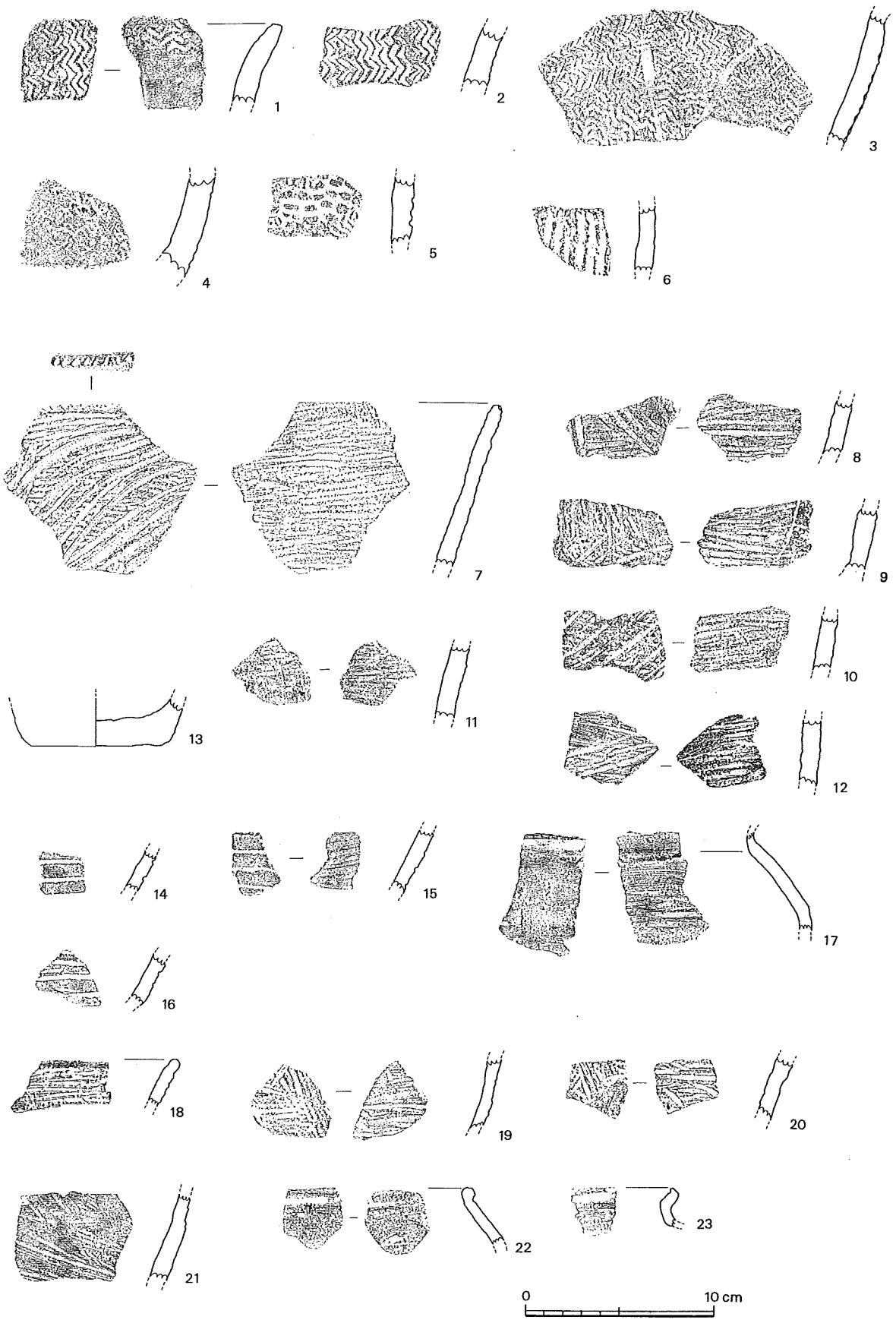
長崎県の縄文晚期遺跡は学史的にも著名であるにもかかわらず、具体的な内容がいまひとつ明確ではない。礫石原遺跡も礫石原式土器という土器型式の標式遺跡でありながら、実体は不明確で、礫石原式土器も漠然と黒川式土器併行という表現で通用してしまっている。

今回の出土土器と過去に本県教委が調査した報告などを参照すると、礫石原遺跡からは刻み目突帶文土器が出土しないということは確実のようである（註2）。上限は古閑式の終わりころの資料が出土しており、古閑式から黒川式への過渡期から黒川式土器、そして刻み目突帶文土器出現直前期までというのが礫石原遺跡より出土する縄文晚期の土器群といえよう。

#### 【註】

註1 近年、長崎県でも大村市の玖島城跡下層、国見町の小ヶ倉遺跡などで出土している。

註2 ボタン状の粘土塊を貼付し、そこに刻目を施す資料は出土している。

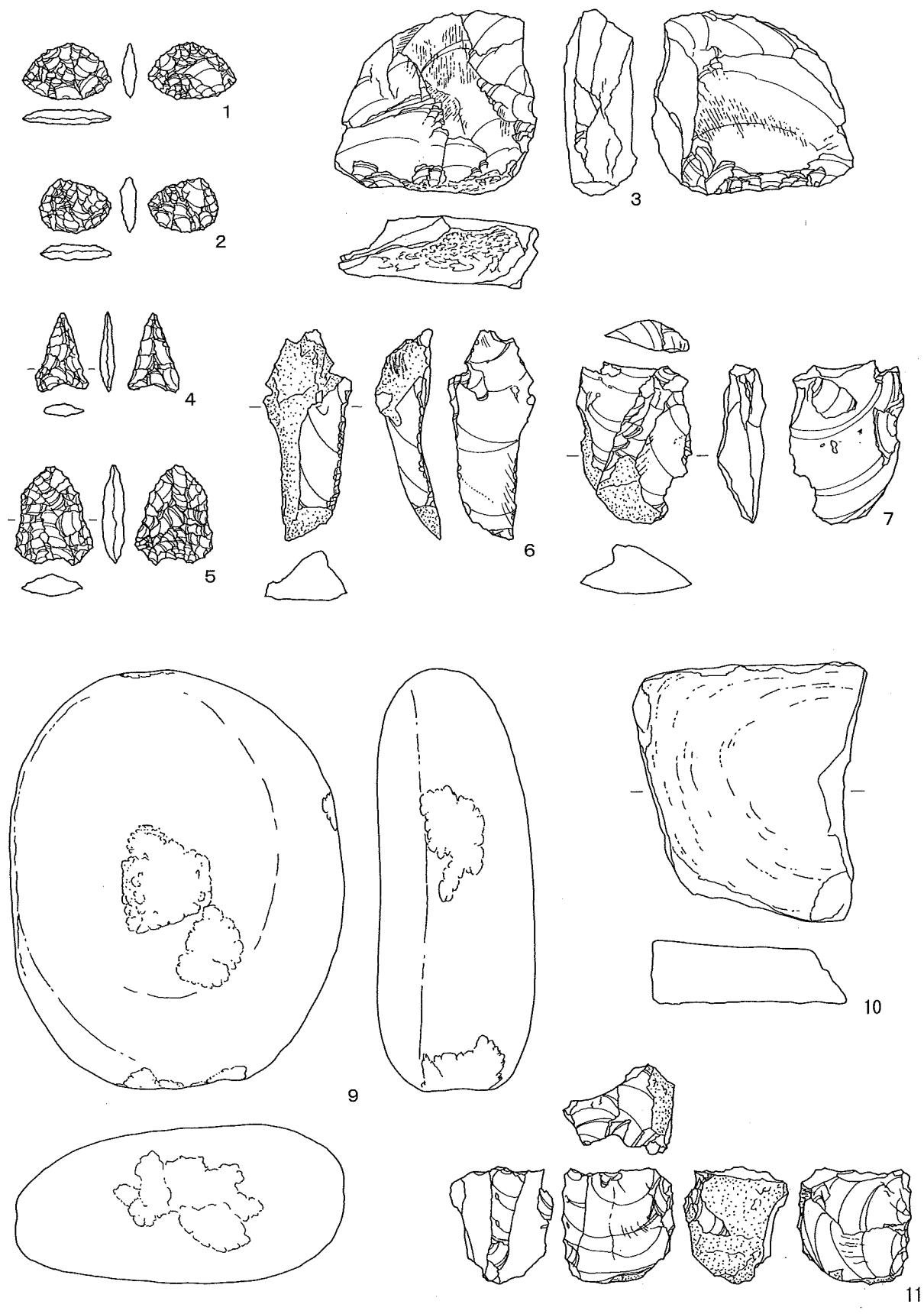


第14図 繩文土器実測図 ( $S = 1/3$ )

## 2 磯石原遺跡出土の石器

黒曜石の剥片類を主体に出土している。黒曜石は、白い不純物を含むものが多く、剥片や石器は小型のものが多い。石核についても、小型であることや、剥片や石核の形態から、素材となる原石は小型角礫であったと思われる。剥片・石器は晩期特有のギラギラと輝きを放つものが多く、風化がほとんどない。1・2は橢円形状に加工した石器で、サイド・ブレイドに近い様相を持つ。周辺からの加工は緻密な剥離によって全体を覆い、縄文後期の石器加工技術に似ている。ただし、本遺跡では、後期の遺物等は出土していないことから、晩期のものであることは間違いない。サイド・ブレイドは後期の石鋸との形態的な類似性や、石鋸との共通した遺跡立地などから、石鋸と同じ機能をもっていたとされる。晩期の遺跡でサイド・ブレイドが出土した例として、西海町のケイマンゴー遺跡がある。ケイマンゴー遺跡は海岸部に位置し、本遺跡と環境的に相違することから、同じサイド・ブレイドとして捉えてよいものか判断しかねる。ただし、本遺跡出土の2点は形態的にも類似していることから、なんらかの作業のために製作された石器であることは間違いないであろう。今後、類似資料を探す必要があろう。3は頁岩製の敲打器である。上部が欠損しており全体形を知ることはできないが、下部に敲打痕が顕著に残る。また、サイドに摩滅痕があることから、何かに挟んで使用したものであろう。4は安山岩製の小型石鎌、5は黒曜石製のもので、どちらも小型の部類に入るであろう。特に5は丁寧な剥離で薄身に作られ、五角形状を呈することが特徴である。先の1・2などと同じ様な加工技術が背景にあったものと思われる。6・7は晩期の剥片特有の自然面を多く残すもので、一側辺に使用痕が見られる。9は4層から出土しており、早期の可能性が高い敲石兼、磨石である。砂岩製のもので、素材は他に求めたであろう。10は板状の磨石で、これも縄文晩期には多く使用されている石器の一つである。11は黒曜石製の石核で、全面の剥離をおこなった後に側面の面取りをし、そこを打面として、背後に2条の剥片剥離をおこなっている。いわゆる十郎川型剥片剥離のシステムの一端をあらわす資料である。

過去の調査では、磨製、扁平打製石斧・使用痕ある剥片・石鎌・擦石・磨石などが出土している。このなかでも際立つのが扁平打製石斧の出土量である。これに対し、石鎌の出土は僅かで、これは他の晩期の遺跡でも同じ様な傾向を示していると判断する。このことは、狩猟から原初的な農耕へという変化を表しているのであり、より農耕的な色彩の強い石器群で構成されていたと考えられる。この中にあって今回出土した石器の中で、サイド・ブレイドに近似する石器が出土したことは特筆される。サイド・ブレイドの研究は当初、農耕的な組み合わせの石器として捉えられていた。ただし、先述したように出土が海岸部に集中するということや、石鋸と加工技術などが近似しているとの指摘から、漁労具として定着してきた。このようなことから考えるならば、本遺跡出土の2点の石器はサイド・ブレイドと同等に扱うことは困難である。ただし、加工の在り方は非常に後期の石器のそれに近似しており、特殊な石器に対しては伝統的な加工技術で石器製作をおこなうという慣習があった可能性がある。今後、本遺跡出土の2点の石器に相当する石器の例を検索し、その位置付けをおこなう必要がある。



第15図 石器実測図 (S = 2 / 3)

0 5 cm

## V章 まとめ

### 1. 磯石原遺跡の現状について

磯石原遺跡は九州の縄文晚期遺跡として著名であるが、遺跡の現状としては、晚期包含層が耕作や傾斜地ゆえの自然流出によって、かなり失われているといわざるをえない。本報告でも述べたように、晚期包含層（第1・2層）は、地元では黒ボクといわれ、戦後の開拓間もないころは層厚1mを越えるほどであったという。黒ボクは同時に肥沃な耕作土として、地元の農業生産に大いに貢献したわけであるが、傾斜地の開拓地の宿命として、耕作土の自然流出という事態が進行している。現在は層厚30mほどであろうか。必然的に縄文時代の包含層も失われているという状況である。

黒ボクの下層は黄ボク（きなぼく）といわれる土で、アカホヤの2次堆積層と考えられる。この層（本報告の第3層）および、檼のみ層（本報告第4層）上面より縄文早期の遺物や遺構が出土する。今回の遺物出土量をみても、早期のものが晚期の資料数より多くなっている事実がある。

### 2. 磯石原遺跡出土の縄文早期土器について

近年の長崎県の調査において、縄文早期末の資料が各地で見つかっている。内外面の貝殻条痕調整や、条痕が綾杉文・折帶文などに文様化しているものもあり、また口唇部にみられる外からの刺突列や、底部が不安定ではあるが平底を呈することなどが特徴である。

従来この種の土器は塞ノ神式土器に後続し、轟B式土器との橋渡しをする資料とみられていた。高橋信武氏が大分県右京西遺跡で注目した資料などが代表的である。学史的には轟A式と呼ばれていたものに類似するところが多いといわれる。

長崎県では、大村市玖島城下層、国見町小ヶ倉A遺跡で出土しており、今回の報告でも新たな資料を確認することができ、今後の研究にはずみがつくといえよう。

### 3. 島原半島の縄文晚期土器編年について

#### （1）島原半島の縄文晚期土器研究の状況

島原半島の晚期の土器型式としては「磯石原式」がある。この型式名は1961年の考古学協会の調査のおりに森貞次郎らが中心となり、設定したもので、「黒川式」に併行するものと考えられていた。

事実、磯石原遺跡では過去の調査において刻目突帯文土器を出土しておらず、そういう意味で磯石原遺跡は島原半島の晚期中葉の標識遺跡として重要である。したがって洞穴遺跡を標識とする黒川式土器よりも当初の型式設定にあたっては、より安定した内容をもっていたといえよう。しかしながら、その後、九州では「黒川式」という型式名が汎九州的に使用され、型式細分も進んでいる。このような状況から判断して、「磯石原式」の使用は島原半島周辺で使用されるべきもので、九州の土器編年に照らすと黒川式土器の段階ということになろう。

宮崎貴夫が「広義の磯石原式」「狭義の磯石原式」と呼称する場合も、「黒川式」の古相・新相に対応して使用している。

かつて筆者は島原半島の晚期前半の土器について、有明町中田遺跡出土土器→島原市畠中遺跡出土土器→黒川式土器とした。肥後地方の編年に照らすと、中田遺跡出土土器は天城式に、畠中遺跡出土土器は古閑式に該当するものである。磯石原式土器を島原半島の黒川式土器段階とする場合も、その特色や組成などのさらなる検討が必要であろう。

# 図 版

(礫石原遺跡)





第2試掘坑出土遺構（第3層上部）



第3試掘坑遺構検出状況



第2試掘坑出土遺構（第3層下部）



第3試掘坑出土遺構（第3層上部）



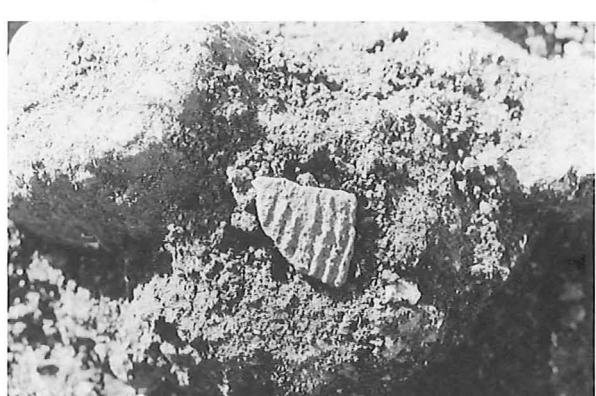
第2試掘坑出土遺構（第4層）



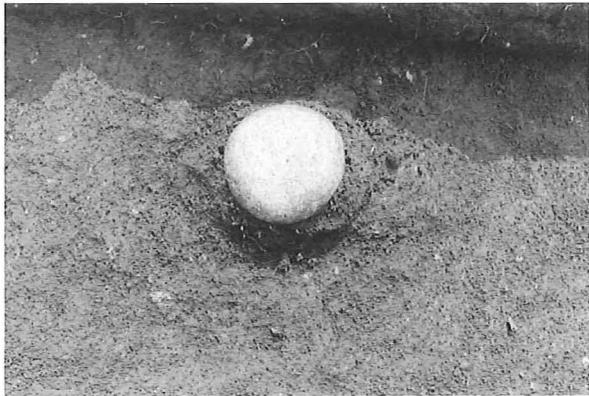
第3試掘坑出土遺構（第4層）



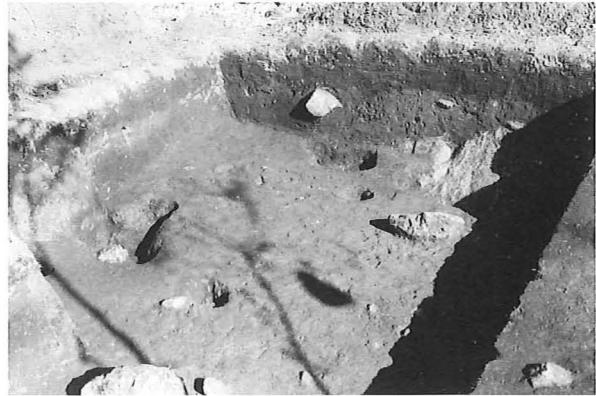
第2試掘坑完掘（第5層）



遺物出土状況（第2試掘坑4層上面）



第3試掘坑遺物出土狀況



第5試掘坑



第5試掘坑北壁土層



第6試掘坑西壁



第5試掘坑



第5試掘坑



第6試掘坑北壁

## 報告書抄録

ふりがな	けんないしゅよういせきないようかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	県内主要遺跡内容確認調査報告書V							
副書名								
卷次	V							
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第165集							
編著者名	古門雅高・福田一志							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2-13 TEL095-824-1111							
発行年月日	西暦2002年3月30日							
所収遺跡	所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
長崎鼻遺跡	きたまつうらぐん うく 北松浦郡宇久 ちょうたいらあざながさきばな 町平字長崎鼻	384	14~19	33° 15' 58"	129° 09' 17"	2000/11/13 ~12/08	96m <sup>2</sup>	主要遺跡内容 確認調査
礫石原遺跡	しまばらし 島原市 くれいしばるまち 礫石原町	203	7	32° 47' 33"	130° 18' 45"	2000/11/13 ~12/08	150m <sup>2</sup>	主要遺跡内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長崎鼻遺跡	包含地	縄文	集石遺構	縄文土器 ・石器				
礫石原遺跡	包含地	縄文	溝・小穴	縄文土器 ・石器				

長崎県文化財調査報告書 第165集

県内主要遺跡内容確認調査報告書 V

平成14年3月30日

発 行 長崎県教育委員会  
長崎市江戸町2-13

印 刷 日本紙工印刷株式会社  
長崎市興善町2-6